

Title	日本文化を体系的に理解するためのテキストブックの研究 オグユスタン・ベルク氏の文化モデルを用いて
Author(s)	高, 山
Citation	
Issue Date	2011-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/9664
Rights	
Description	Supervisor: 由井 園隆也 准教授, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

日本文化を体系的に理解するためのテキストブックの研究

—オギュスタン・ベルク氏の文化モデルを用いて—

指導教官 由井 蘭 隆也

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識科学専攻

0850204 高 山

審査委員： 由井 蘭 隆也 准教授（主査）

Ho Tu Bao 教授

國藤 進 教授

本多 卓也 教授

2011年2月

目次

第1章 はじめに

1. 1 研究の背景	1
1. 2 研究の目的	4
1. 3 研究方法	5
1. 4 論文の構成	6

第2章 関連研究

2. 1 『空間の日本文化』とベルクの文化論について	7
2. 1. 1 ベルク著『空間の日本文化』とベルクについて	7
2. 1. 2 ベルクの文化論の基本的考え方	9
2. 2 中国における日本文化教材と『空間の日本文化』との比較	10

第3章 テキストブックの作成

3. 1 作成方針	16
3. 2 『空間の日本文化』のアンケート調査	17
3. 3 アンケート結果に基づくテキストブック項目の選択	24
3. 4 テキストブック内容の設定と編集	26

第4章 テキストブックの評価実験について

4. 1 実験内容	3 1
4. 2 テストとテキストブックに関するアンケートの位置づけ	3 2
4. 3 採点方法と採点の例	
4. 3. 1 採点方法と採点基準	3 4
4. 3. 2 回答と採点の一例	3 5

第5章 評価の結果と考察

5. 1 テストの結果と考察	3 9
5. 2 アンケートの結果と考察	4 1

第6章 結言

6. 1 まとめ	4 3
6. 2 今後の課題と展望	4 4

謝辞	4 5
----	-----

参考文献	4 6
------	-----

付録 A 知識表現論発表とビデオの要点	4 7
---------------------	-----

付録 B

B-1 『空間の日本文化』のアンケート様式 (日本言語文化専攻用)	5 8
B-2 『空間の日本文化』のアンケート様式 (非日本言語文化専攻用)	6 1

B—3	『空間の日本文化』のアンケートの回答	64
付録C	テキストブック	66
付録D		
D—1	テスト様式	82
D—2	テキストブックアンケートの様式	85
D—3	テスト結果	89

目 次

図 1	世界での日本語学習者数の推移	1
図 2	日本語学習者数の内訳	2
図 3	日本語教育上の問題点	2
図 4	研究方法	5
図 5	『空間の日本文化』の特徴	6
図 6	『空間の日本文化』の表紙（左）とその原著の表紙（右）	7
図 7	『空間の日本文化』の目次の構成	8
図 8	ベルクの文化論の構図	10
図 9	『日本概観』の目次構成	11
図 10	『日本の言語とコミュニケーション』表紙	12
図 11	『日本の社会と文化を読む』表紙	14
図 12	テキストブック作成の流れ	17
図 13	様々な知識表現変換の例	18
図 14	難しさの順位	24
図 15	生活に役立つ順位	24
図 16	テキストブックの構成	26
図 17	テキストブックの実験手順	31

表 目 次

表 1	『空間の日本文化』アンケート調査平均値 1	2 2
表 2	『空間の日本文化』アンケート調査平均値 2	2 2
表 3	アンケート質問項目	3 4
表 4	各参加者の得点	3 9
表 5	二組のテスト結果	3 9
表 6	アンケートの結果	4 1

第1章 序論

1.1 研究の背景

中国と日本は一衣帯水の隣国で、二千年にわたる文化的交流の歴史があり、経済的にも深くかかわっているとされている。中国では、日本語がすでに英語以外に一番人気のある外国語になっている。2010年7月に国際交流基金により発表された「2009年海外日本語教育機関調査」結果(図1)[1]によると、海外の日本語学習者の5割以上が東アジアに集中し、東南アジアに伸びている。東アジアと東南アジアだけで学習者数全体の80%を超えている。そして、第2位は中国であり、約83万人(22.7%)であり(図2)、中国では高等教育機関が中国日本語教育機関の67%という大きな割合を占めている。その中、日本語教育上の問題点においては、高等教育の機関では「教材不足」を一番大きな問題として挙げている(図3)。全体的にリソース面の不足が目立つと指摘されている。

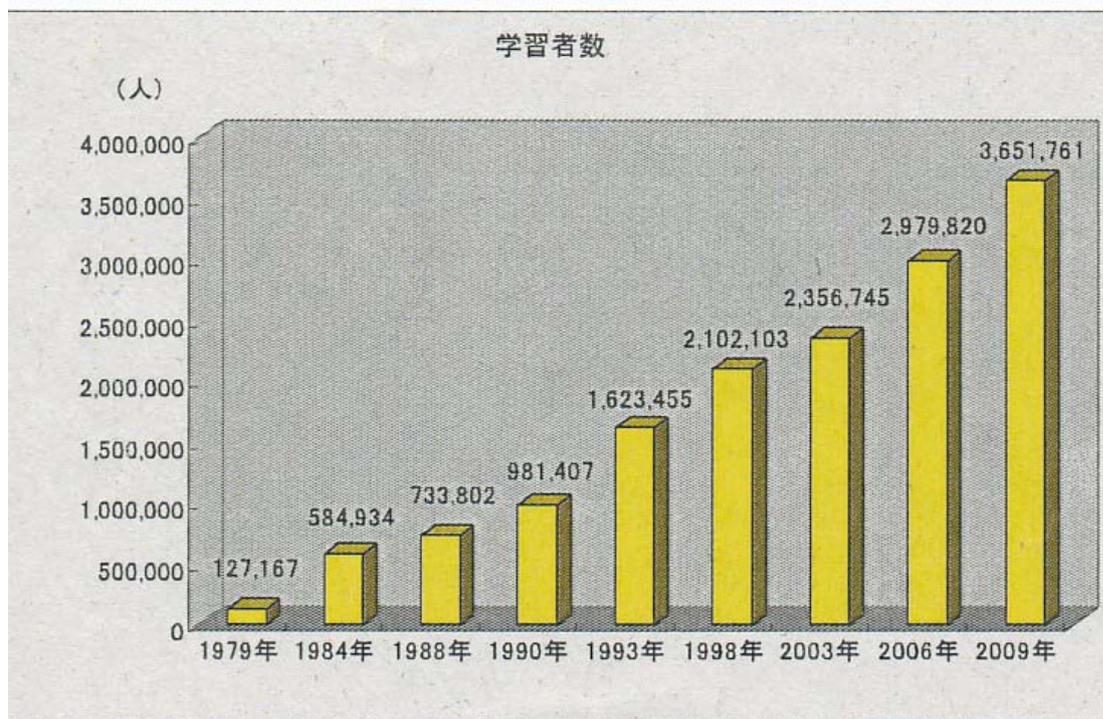


図1：世界での日本語学習者数の推移（「2009年海外日本語教育機関調査」[1]）

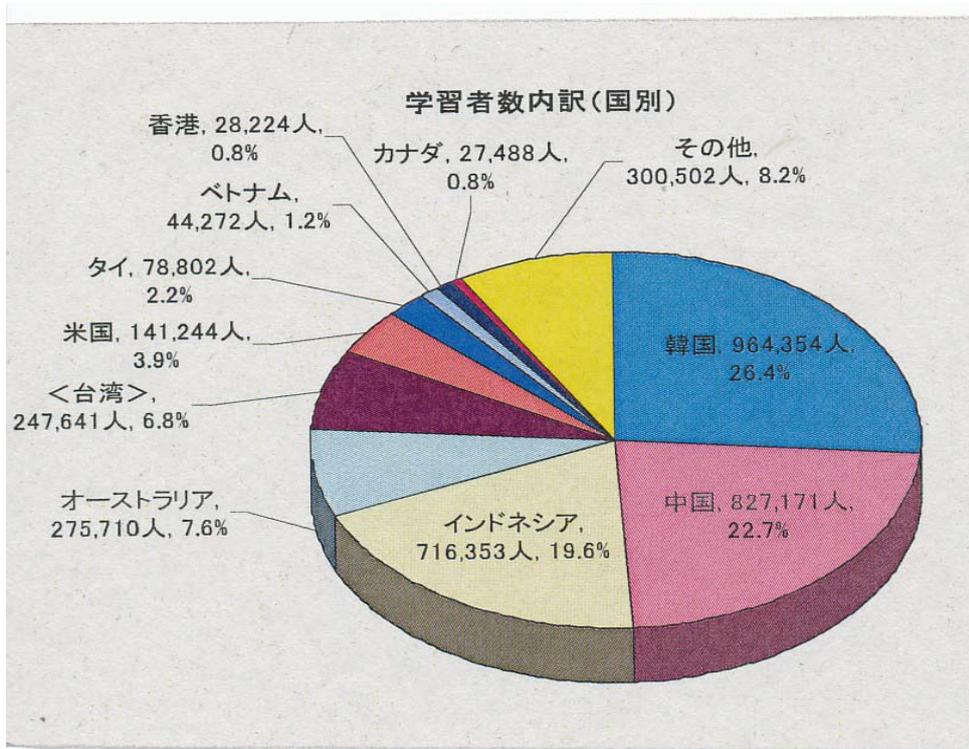


図2：日本語学習者数の内訳（国別）（「2009年海外日本語教育機関調査」[1]）

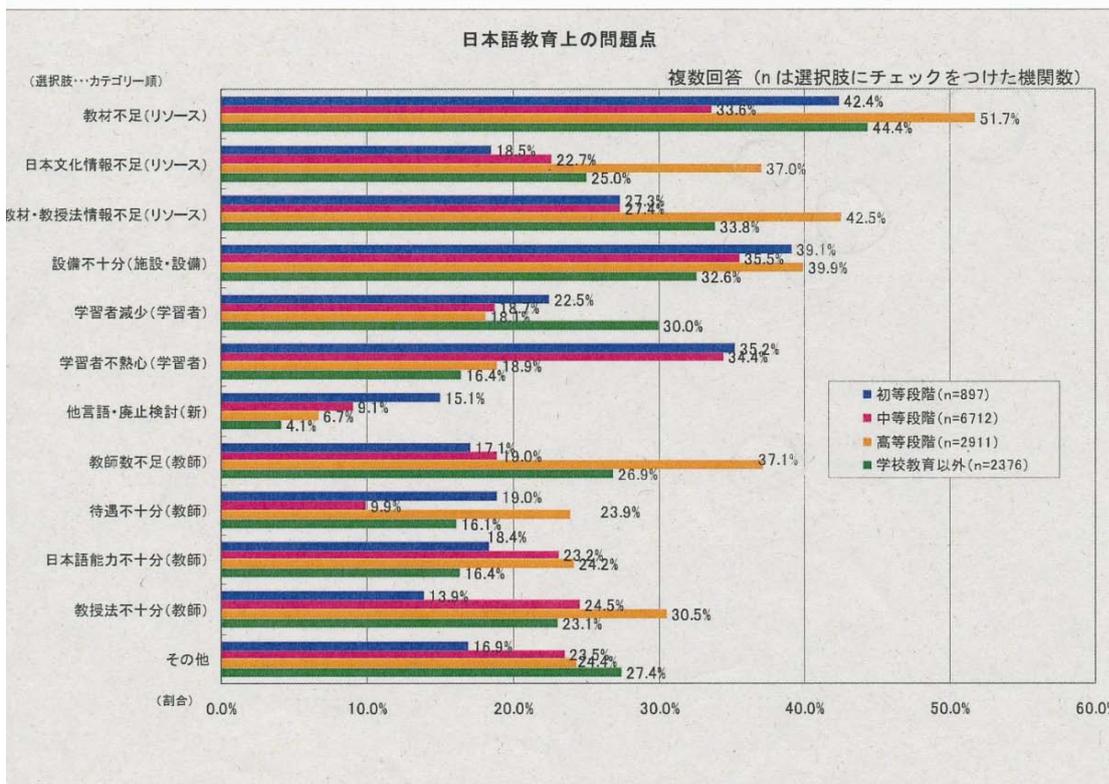


図3：日本語教育上の問題点（「2009年海外日本語教育機関調査」[1]）

ここで、中国における日本語教育状況について述べる。有馬と岩澤[2]によると、中国各大学の日本語専攻学科は伝統的に非常に高い教育レベルを誇っているが、新しいシラバスにしたがった教材の開発・教授活動の研究もより一層期待されるところである。

荒木[3]は著書『日本語から日本人を考える』の中で言語が特定民族の文化、あるいは価値体系、世界観、宇宙論などと深くかかわっている、と指摘している。また、森山[4]によると、国際交流と国際理解の中で、言語の習得だけではもはや不十分で、その背景にあるところの文化までもその視野に入れて学習する必要があるとされている。日本語においても同様で、日本語学習は日本や日本人、日本文化への理解なくしては成り立たない状況にある。そして、箕浦[5]によると、文化は意味の体系であって、私たちはその社会特有の意味づけの枠組みで物事を理解していると指摘しているように、通常コミュニケーションのスタイルもまた社会特有の意味体系の中で選択されているものである。したがって、異文化にいる人間はお互いによくコミュニケーションできるために、お互いの社会特有の意味体系で理解しなければならないと考えられる。

以上より、言語にはその民族の文化が隠されていて、言語をよく身につけるには、文化への理解が重要とされると考えられる。異なる文化のもとで、異なる心理や発想が生まれ、また、異なる心理、発想が持たれているため、言語を使う習慣も違うことになると考えられる。そこで、ある言語を十分に理解し、上手に使いこなすためには、異文化コミュニケーションにおいてお互いによく理解するためには、その言語の背景にある文化やその文化の心理や発想などを知っておくのが重要なことであろう。

柴田と山口[6]は『日本語習得における人間関係の認知と文化的要因に関する考察』の中で、日本語教育の現場では、言語の教育に比べ文化の教育はいまだ十分に構造化されておらず、教師が文化教育を行うための訓練や方法論もなお不十分というのが現状であると述べている。

したがって、日本語教育においては日本文化の教育を行うことが重要である。中国では、日本語教育において高等教育機関が69%の割合を占めていながら、それに関する教材不足、教材の開発が問題になっている。そして、柴田と山口によると、文化の教育はまだ十分に構造化されていないとされる。よって、文化教育の構造に役立つ教科書が求められる。更に、文化理解が言語の習得や異文化コミュニケーションにおける重要性から、より進んだ文化理解を深める教科書が重要になる。箕浦によると、文化は意味の体系であって、私たちはその社会特有の意味づけの枠組みで物事を理解しているので、中国人学習者が日本文化をよく理解するために、日本社会特有の意味体系で理解するのは重要である。以上より、中国人日本語文化学習者に日本文化の原理と体系を教えるテキストブックが求められるであろう。

1.2 研究の目的

研究背景に述べたように、中国日本語教育における高等教育機関の日本文化の原理と体系を教えるテキストブックが求められるという問題に基づいて、本研究では高等教育機関の日本語文化学部で日本文化教育用のテキストブックを作成する。中国の現状で使われている日本文化教材には、文化への原理的・体系的理解に対する工夫が欠けている。それに対して、オギュスタン・ベルク著（宮原信訳）の『空間の日本文化』（ちくま学芸文庫、1994）[7]の原理的かつ体系的考え方が日本文化への理解に非常に役立つと考えている。

そこで、本研究ではベルク氏の文化体系を用いて、授業で調査を行い、中国人日本語文化学習者向けのテキストブックを作成する。テキストブックは原著より分かりやすくなるのが望ましい。作成したテキストブックを学習してもらうことによって、日本文化の原理的・体系的理解を深めることを目的とする。そして、作成したテキストブックを評価してもらうことによって、テキストブックの有効性を検証し、日本語教育に役に立つことを示す。

1.3 研究の方法

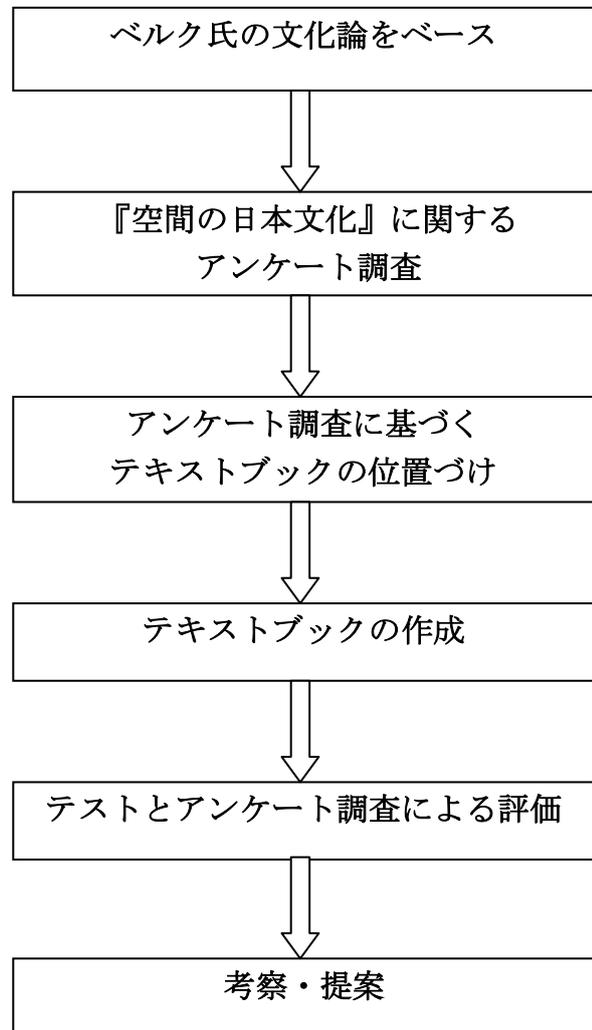


図4：研究方法

研究方法としては（図4）、最初にベルク氏の文化論をベースとする。『空間の日本文化』は精神的空間、物理的空間、社会的空間に分けていて、同じ原理が類似的に三つの空間に現れる。本研究では空間毎に一つずつの項目を選択し、テキストブック作成に用いる。テキストブックの作成の参考として、『空間の日本文化』を教科書とする授業「知識表現論」で『空間の日本文化』についてアンケート調査を実施する。アンケート調査の結果を踏まえて項目を選択し、テキストブックを作成する。最後に、テキストブックの有効性を検証するために、テキストブックに関するアンケート調査とテストにより評価をもらう。

ベルク氏の『空間の日本文化』を用いる理由としては、二点あげることができる。第一に、この本は表面的知識を述べるだけではなく、日本文化への原理的理解に役立つと思われる。例えば、中国における日本語教育の初中級段階では、擬声語は単語として意味を覚えるだけのほうが多い。しかし、『空間の日本文化』の中の「知覚されたものの言語化＝擬声語、擬態語」項に、「日本語がしばしばわずかな言語化だけで満足する」、そして、「言語化程度が少ないという日本語の傾向は、主体をその環境からできる限り引き離すまいとする日本文化の傾向を示している」、更に「この傾向は、空間の社会的構成にも、技術体系の構成にも現われている」と説明している。第二に、『空間の日本文化』は日本社会を関連的、体系的に考えることができることである。ベルクは具体的な例をもとにして、その裏に存在している原理を述べている。そして、図5に示すように、違った分野でも同じ原理が働くことがありうる、と主張している。この特徴に基づいて、ある程度日本文化の分かっている学習者に対して、もう一つ高いレベルで日本文化を理解するための大変良い参考になると考えている。

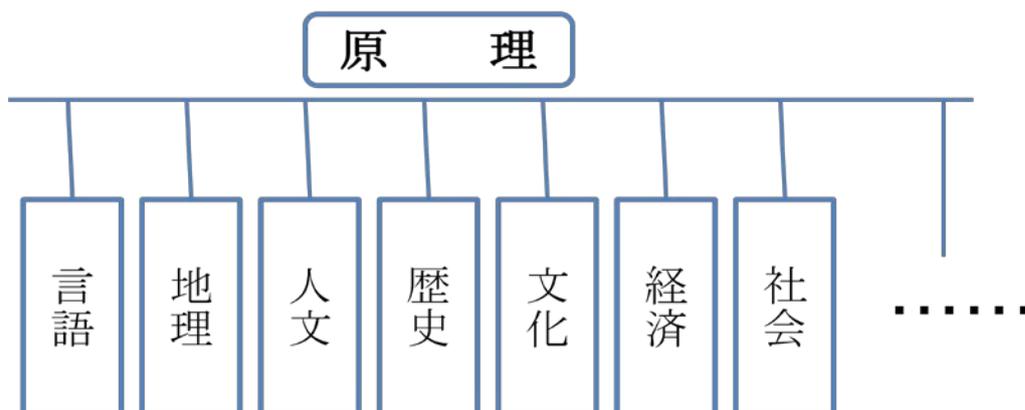


図5 『空間の日本文化』の特徴

1.4 論文の構成

本論文の構成は全体で六つの章から構成されている。以下、第2章では、ベルクと『空間の日本文化』及び中国の日本文化教育教材について述べる。

第3章では、テキストブックの作成方法と内容について説明する。

第4章では、テキストブックの評価実験について説明する。

第5章では、テキストブックの評価結果と結果に基づく考察について述べる。

第6章では、本論文のまとめと今後の課題について述べる。

第2章 関連研究

2.1 『空間の日本文化』とベルクの文化論について

2.1.1 ベルク著『空間の日本文化』とベルクについて

『空間の日本文化』はフランス人のオギュスタン・ベルクがフランス語で出版し、日本人の宮原信により翻訳された本である。

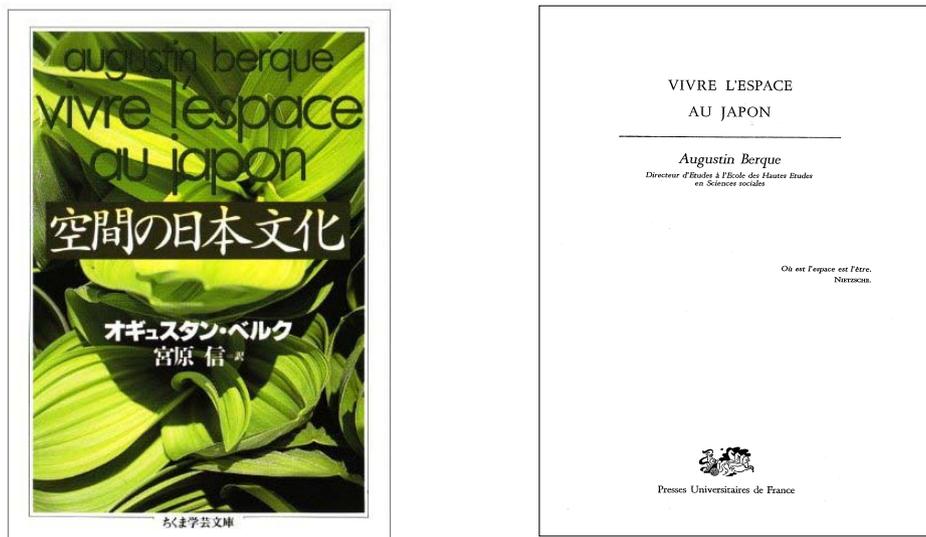


図6 『空間の日本文化』の表紙（左）とその原著の表紙（右）

この本は言語、思考様式、慣習、制度、社会、技術などさまざまな分野の内容を扱っていて、西欧文化と対比しながら、具体例も豊富に取り上げながら述べている。更に、このようならばらみたいなことを基礎的かつ包括的に捉えている。それが広い視野と深い観点から日本人や日本文化を理解するきわめて良い材料になる。

次に、『空間の日本文化』の構成について説明する。目次の構成は図7に示す通りである。

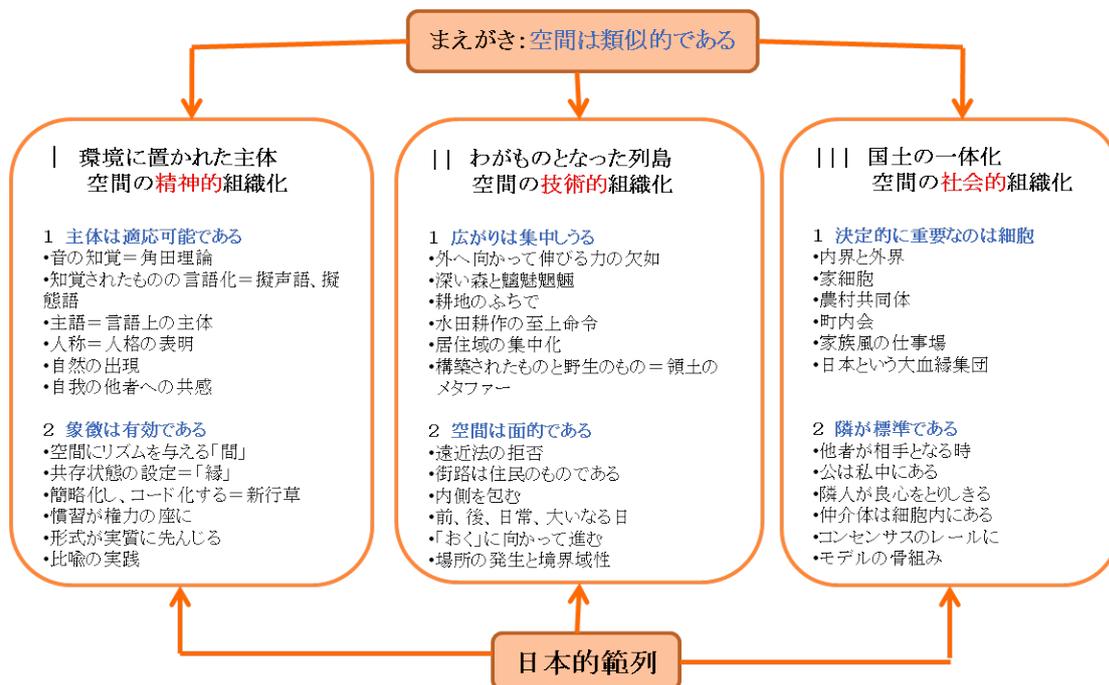


図7 『空間の日本文化』の目次の構成

本の構成は「まえがき」から始まり、それから三つの章に分けて、それぞれの章が二つの節に分けている。また、各節が六つの項目からなっている。各節のタイトルがその節で述べる原理になっている。最後に結論（日本的範列）になる。全本では、七つの命題が総合原理として取り上げられている。すなわち、

- 第一原理：空間は類似的である
- 第二原理：主体は適応可能である
- 第三原理：象徴は有効である
- 第四原理：広がり集中しうる
- 第五原理：空間は面的である
- 第六原理：細胞が主要（決定的に重要）である
- 第七原理：準拠は隣接している（隣が標準である）

第一原理（空間は類似的である）については、「まえがき」で論じられている。第二原理（主体は適応可能である）と第三原理（象徴は有効である）は、第1章「環境に置かれた主体—空間の精神的組織化」で論じられている。第四原理（広がり集中しうる）と第五原理（空間は面的である）は第2章「わがものとなった列島—空間の技術的組織化」で論じられている。第六原理（細胞が決定的に重要である）と第七原理（準拠は隣接している）は、第3章「国土の一体化—空間の社会的組織化」で論じ

られている。

次に、オギュスタン・ベルクについて経歴を紹介する。フランスに生まれ、ソルボンヌ大学、オックスフォード大学で地理学と東洋学（中国、日本）を学ぶ。北海道の殖民に関する研究で、パリ大学から地理学博士号および文学博士号を取得している。1969年、最初に日本を訪れて以来、日本に15年以上滞在し、この間、日仏会館フランス学長、国際日本文化研究所客員教授を歴任し、1978年より、フランス国立社会科学高等研究院教授を務めている。風土学の領野を開拓し、独自の画期的な理論を構築するとともに、‘日本文化の科学的な理解に新次元をもたらした’と評価されている。著書に『風土の日本』、『風土としての地球』などがあり、福岡市が主催している第20回（2009年度）福岡アジア文化賞大賞を受賞している。

2.1.2 ベルク氏の文化論の基本的考え方

ベルクは「まえがき」で彼の文化モデルについて次のように述べている。“それぞれの社会は、その文化特有の総合秩序によって空間を組織し、独自の空間性をもつ。この空間性はいかに多面的であっても、統一性をもっている (P3)。”そして、「空間」という言葉を“主体と客体の関係”であると定義されている (P15)。客体は主体を取り巻くすべてであり、自然も社会も街も農村も他人も入る。すなわち客体は主体にとっての「環境」である。そして、“主体が客体に対して自らを定義する方法によって、空間の質が決定される。”とベルク氏は述べる。主体の定義を左右するものとしては、さまざまあるが、ベルク氏が扱っているのは、文化的要因である。

ベルク氏は空間を三つに分けている。すなわち、「精神的空間」、「物理的空間」、「社会的空間」である。そして、それらの空間の間にその文化特有の関連体系が存在していると指摘する。この関連体系が前に述べた総合秩序であり、統一性である。

図8にベルク氏の文化論を表してみる。



図8 ベルクの文化論の構図（杉山[8]）

説明すると、「日本的空間のそれぞれの面はみないくつかの総合原理に従っている。そして、同じ原理は、それぞれの分野において、類似（アナロジー）的に現われ、比喩（メタファー）的に一つの分野からその他の分野へ移動（メタファー）するのである」とベルクは述べる。例えば、第1章2節で論じられる「間」という言葉は、もともと「二つのものの間隔」と定義された物理的なものだったが、人間関係や芸術分野においても使われるようになった。それは、「間」という言葉が象徴化され、比喩的（メタファー）に他の分野に移行し、類似的（アナロジー）に現われている結果であるということである。ベルク氏は『空間の日本文化』の中で、いくつかの具体的な例をもとにして、日本的空間のアナロジー的な同一性を体系的に捉えようとしている。

2.2 中国における日本文化教材と『空間の日本文化』との比較

中国で使われている日本文化教材の例として、『日本概観』について説明する。『日本概観』は日本語で2005年出版された日本概況を紹介する本である。対象はある程度で日本語の基礎を持つ大学の日本語専攻・非日本語専攻の学生と、貿易・旅行に携わる人となる。目次構成を図9に示す。



<p>第四章 文化</p> <p>第一節 日本人の起源と意識 第二節 文化と芸術 第三節 余暇生活</p>	<p>第五章 政治</p> <p>第一節 日本のシンボル 第二節 政治機構の特徴と機能 第三節 地方自治体の運営 第四節 日米安保体制と日本の防衛 第五節 外交政策</p>	<p>第七章 科学と教育</p> <p>第一節 科学研究と技術開発 第二節 教育制度と教育改革</p>
<p>第一章 地理</p> <p>第一節 日本の地理 第二節 日本の資源</p>	<p>第二章 人文</p> <p>第一節 人口と行政区画 第二節 四季と年中行事 第三節 家庭生活と風俗習慣</p>	<p>第三章 歴史</p> <p>第一節 日本国の起源 第二節 古代国家の形成と発展 第三節 中世・近世の武士社会 第四節 近代の開国と侵略拡張 第五節 戦後の政治迂回</p>
<p>第六章 経済</p> <p>第一節 国家の経済運営 第二節 戦後経済の歩みと産業の現状</p>	<p>第八章 社会</p> <p>第一節 社会福祉の働き 第二節 マスコミとインターネットの現状</p>	

図9 『日本概観』の目次構成

目次に示されているように、この本はさまざまな分野に触れている。しかし、多くの部分は表面的知識をばらばらに述べている。「何はこうです」と事実・現象を教えるだけであるのに対して『空間の日本文化』は「何がどうしてこうだ」と原理を教える。もともと、点みたいなばらばらの知識が「原理」という線により繋げられる。

例えば、『日本概観』では、日本家屋について次のように紹介される。「伝統的な日本の住宅では、入り口は‘玄関’といい、部屋と部屋の間ドアは‘襖（ふすま）’という。」「部屋の仕切りや明かり取りにする建具は‘障子（しょうじ）’という。」(P54)のように教えている。それに対して、『空間の日本文化』は日本家屋を西欧と比べて特徴を述べ、それが日本の個人性の弱さにつながると指摘する。

更に、『日本概観』では「日本人の家を訪ねる時に、玄関でお辞儀をしてあいさつするのが一般的である」(P54)。「能は、独特な舞台の上で曲に合わせて舞い踊る楽劇である。主役は能面をかぶり、ゆっくりとした仕草で動き、劇的な要素が少ない」(P117)と教える。それに対して、『空間の日本文化』の第1章2節では、「間」という概念が述べられ、それが「玄関」と「能」の裏に存在する原理になる。もちろん、『日本概観』は概説の立場に立つので、簡明に紹介しようとしていると思われる。

次に、中国大連民族学院日本語文化学部において三年生向けに開講される「異文

化コミュニケーション」という授業で使われた教材『日本の言語とコミュニケーション』について説明する。教材の目次構成を図 10 に示す。

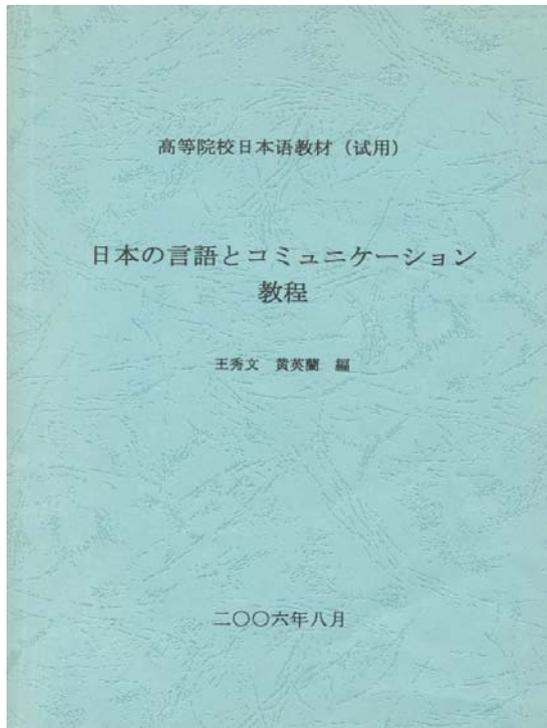


図 10 『日本の言語とコミュニケーション』表紙

第一章 異文化コミュニケーションの基礎概念
第一節 文化とコミュニケーション
第二節 異文化コミュニケーション
第三節 相手の靴をはいてみる—感情移入
第二章 日本人と日本語
第一節 日本文化と日本語
第二節 日本人の世界観と日本語
第三節 日本人の心と日本語
第三章 日本語と人間関係
第一節 日本の社会的人間関係
第二節 敬語と社会意識
第三節 人称と呼称
第四節 女性語

第四章 日本語コミュニケーションの規則
第一節 現代話題のさまざま
第二節 紹介と自己紹介
第三節 あいさつ
第五章 場面によるコミュニケーション
第一節 電話によるコミュニケーション
第二節 手紙によるコミュニケーション
第三節 電子メールとコミュニケーション
第四節 チャットとコミュニケーション
第六章 日本語と非言語コミュニケーション
第一節 非言語コミュニケーションとは
第二節 身振り言語とコミュニケーション
第三節 表情・視線とコミュニケーション

この本の第二章三節では主語・目的語等の「省略」について述べている (P39)。そして、第三章一節では「うちとそと」について述べている (P43)。ただし、それぞれの現象だけを説明している。一方、『空間の日本文化』では、主語の「省略」と「うちとそと」を例としてあげながら、その裏の原理（「主体は適応可能である」）によって述べている。つまり、ベルク氏の文化論によると、主語の「省略」と「うちとそと」の間に類似している。つまり、同じ原理が違う領域に類似的に現れる。

また、『日本の社会と文化を読む』は中国大連民族学院日本語文化学部において三年生向けに開講される「日本社会と文化」で使われた教科書である。この教科書はすでに日本概況や精読・汎読などの授業を通して、ある程度日本の社会や文化に触れた日本語学科高学年の学生を対象とする。この本の目次構成は次のようである。

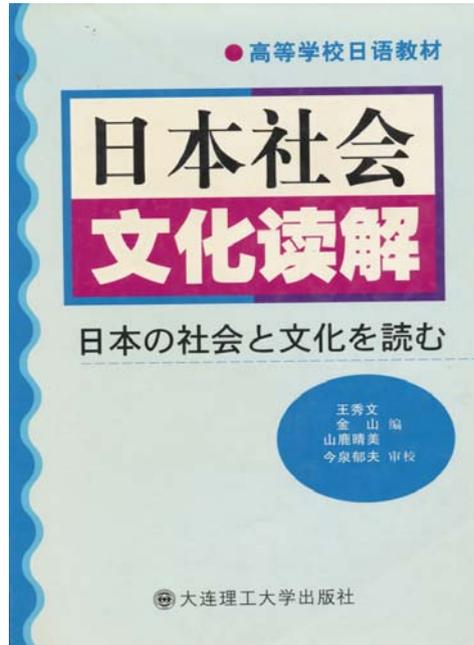


図 11 『日本の社会と文化を読む』表紙

第一章 日本の風土と文化

1. 日本の風土
2. 季節と文化・対談
3. 日本の美学・対談

第二章 日本の民俗と文化

1. 先祖と氏神
2. 妖怪と幽霊
3. 年中行事
4. 女性と子供

第三章 日本の社会構造

1. 家族内の人間関係
2. 家族（ウチ）とソトの関係
3. 社会調査による「タテ社会」の検証
4. 現代の女性問題
5. 高齢社会

第四章 日本人の行動様式

1. 生活と文化
2. 交際と贈答
3. カルチャーショック

第六章 日本人の精神構造

1. 「甘えの構造」の検証
2. 「恥の文化」の検証
3. 「日本教」の検証

この三つの教材は文化をばらばらに表面的知識を教えているのに対して、ベルク氏の『空間の日本文化』は原理によりさまざまな知識を体系的に捉えようとしている点が特徴的である。

第三章

テキストブックの作成

3.1 作成方針

中国人日本語文化学習者は、学部において『日本概観』、『日本社会文化読解』、『日本の言語とコミュニケーション』等のように文化の原理を用いた体系化が行われていない日本文化教科書を勉強した。このような学習者たちは日本文化における自然の特徴や風俗習慣や国民性などをある程度知っているが、ただ情報として頭に保存し、まだばらばらの知識の形で理解しているレベルに止まっているのではないかと考えた。オギュスタン・ベルク氏の文化論によると、ある社会の文化においては、総合原理があり、象徴の比喩的移行によりそれぞれの領域に類似的に出現するとされる。違う領域における関係ないような現象に同じ原理が機能している。学習者が学部で勉強した日本の言語や風俗習慣や自然の特徴はお互いに関連している。例えば、日本語にはよく主語が省略（省略というより元々なくともお互いにわかり合う）されるということが多くの人に知られている。しかし、この現象をどういうふうに解釈すればいいか、また、それが日本の家屋と、日本的集団との関係あるについて考える人が少ないだろう。

上に述べた原理的かつ体系的な見方を分かっていたら、文化への理解が深まると考えている。特に、日本語文化学習者たちは日本に留学し、周りのことを観察しているはずであり、学部で勉強したことと比べがちであるように思われる。この時、原理をもって体系的に文化を見れば、実は周りのことがつながっていると発見できると考えた。そこで、この見方の学習が大事であると考えている。ただし、『空間の日本文化』の中で日本の言語、習慣、社会などがさまざまな分野が取り扱われており、ある程度日本文化が分かっている人でないと、分からない可能性が高い。したがって、本研究のテキストブックは、すでに日本文化にいろいろと触れたことがあり、日本文化がある程度分かっている学生を対象とする。

以上に述べたことから、ベルクの『空間の日本文化』は考え方においては日本語文化学習者に極めて良い材料であると思われる。しかし、よく読解が難しいと言われ、学習者たちになじみを感じていないようである。そのため、『空間の日本文化』について「知識表現論」授業で調査を行った。詳細は 3.2 「『空間の日本文化』のアンケート調査」で説明する。

本研究のテキストブックにおいては、ベルク氏の文化体系を用い、『空間の日本文

化』の三つの空間から関連している項目を一つずつ取り出し、テキストブックの内容のベースとする。これを一例として、この見方で日本文化への理解が深まることを望む。

ここで、図 12 に従ってテキストブック作成の流れを説明する。最初に、講義「知識表現論」で『空間の日本文化』のアンケート調査を行う。次に、アンケート調査の結果を踏まえて、適切に『空間の日本文化』から項目を選択する。次に、選択した項目の内容を材料としてテキストブック内容の設定と編集を考え、テキストブックを作成する。テキストブック内容の設定と編集において、選択した三つの項目の内容をもとに、知識表現変換（杉山[8]）を行い、中国の事例と自分の日本滞在経験をテキストブックに入れることとした。この設定により、分かりやすくすることを目標とする。

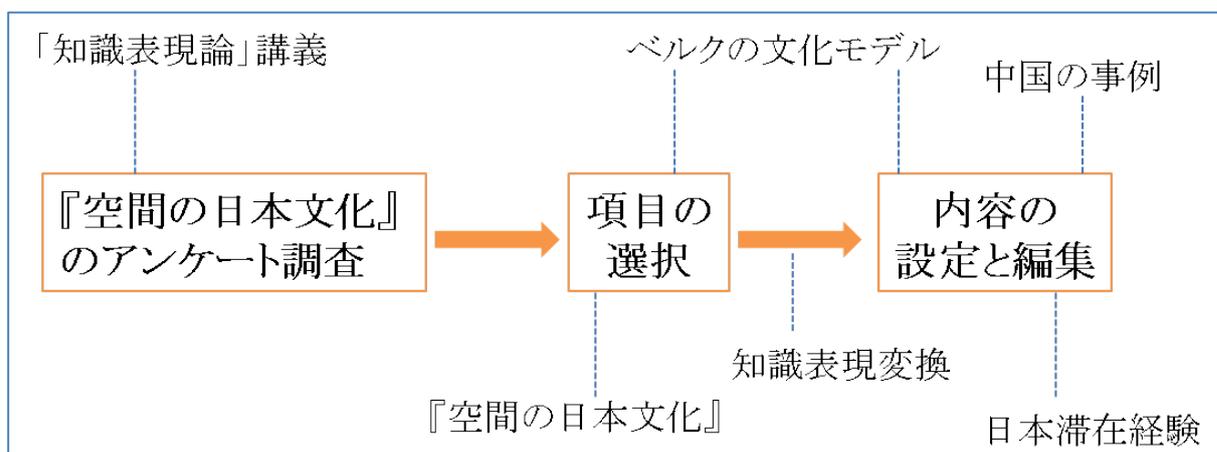


図 12 テキストブック作成の流れ

知識表現変換というのは、重要と思える語句に関して辞典を調べて情報を追加したり、分かち書きをしたり、図表化して全体構図を表したりすることである。つまり、文字表現のものを図表現に変換するなど、書かれている知識の表現を別の表現に変換してみることを指している。図 13 にこのような知識表現変換の例を示す。『空間の日本文化』の「まえがき」の部分の文字表現（図の左）に様々な知識表現変換をほどこしていく様子が示されている。

本研究では主に図表や重要語句のカラー付けと文章の考えや論述の流れを構造化した図を利用することとする。

3.2.2 アンケートの質問項目

『空間の日本文化』は「知識表現論」の講義において使われた教科書である。この講義は受講生の発表とディスカッションを中心とした講義である。講義での発表とディスカッションは良いデータになると考えられてビデオを撮っていた。そして、授業の後、ビデオを利用して発表とディスカッションの要点（付録 A 参照）をまとめた。ディスカッションに出現した内容は、みんなが関心を持った、あるいは疑問に思ったところであると考えられるので、ビデオの要点を参考にアンケートの質問項目を作った。

3.2.3 対象

今回のアンケートは 2009 年度と 2010 年度「知識表現論」の受講者の全員をアンケートの対象とした。2009 年度では、8 人の受講者の中、中国人が 7 人であり、日本人が一人である。2010 年度では、10 人受講者の中、中国人が 7 人であり、日本人が 3 人である。本研究におけるテキストブックの対象は中国人日本語文化学習者であるので、アンケートの対象構成としては、日本語文化専攻出身者（中国人）と非日本語文化専攻出身者（中国人と日本人）に分けている。日本語文化専攻出身者（中国人）は 8 人である。非日本語文化専攻出身者は 10 人である。その中では、日本人が 4 人で、中国人が 6 人である。実施期間は 2010 年 12 月 2 日—2010 年 12 月 9 日である。

3.2.4 アンケートの様式と採点方法

『空間の日本文化』の読後の感想について五段階評価方法を取っている。質問項目は次のようである。

- ア 読解が易しい。
 そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない
 そう思わない
- イ 日本文化の理解が深まった。
 そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない
 そう思わない
- ウ さまざまな分野（言語、自然、芸術、建築等）が繋がっていてよ
 かったと思う。
 そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない
 そう思わない
- エ 西欧の事情と比べながら述べられているところがいいと思う。
 そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない
 そう思わない
- オ 中国のことを加えて比較したら、わかりにくいと思う。
 そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない
 そう思わない
- カ 「間」について感覚的には理解しにくいと思います。
 そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない
 そう思わない
- キ 『空間の日本文化』を読んでいるうちに、中国のことに関して考
 えるようになっている。
 そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない
 そう思わない

採点方法はプラス通りに5点～1点を付けることとした。

また、受講者たちはどこがわかりやすいか、どこが生活に役立つと思うかの情報を
 得るために、順位を付ける質問項目を設けるのである。次のようになる。

『空間の日本文化』には第一章一節が 12 項目 に分けています。枠内の 12 項目に対して 難しさの高い順位をつけてください。(六つまで)

- ① _____ ② _____ ③ _____
 ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____

「音の知覚」	「間」
「擬声語、擬態語」	「縁」
「主語」	「真行草」
「人称」	慣習が権力の座に」
「自然の出現」	「形式が実質に先んじる」
「自我の他者への共感」	「比喩の実践」

枠内の 12 項目に対して日常生活に近い、普段の生活に役に立つと思う項目の高い順位をつけてください。(六つまで)

- ① _____ ② _____ ③ _____
 ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____

「音の知覚」	「間」
「擬声語、擬態語」	「縁」
「主語」	「真行草」
「人称」	慣習が権力の座に」
「自然の出現」	「形式が実質に先んじる」
「自我の他者への共感」	「比喩の実践」

採点方法は順位の高さ通りに 6 点～1 点を付けることとした。例えば、①番は「比喩の実践」となる場合は、「比喩の実践」に 6 点をつける。⑥番は「主語」となる場合は、「主語」に 1 点をつける。すなわち、点数が高ければ高いほど、難しさが高く、普段の生活に役立つと思われる程度が高いことになる。

3.3 アンケート結果に基づくテキストブック項目の選択

まず、五段階質問項目の日本語文化専攻出身回答者の結果を表1に示す。

質問項目	平均値
ア 読解が易しい。	2.0
イ 日本文化の理解が深まった。	4.4
ウ さまざまな分野（言語、自然、芸術、建築等）がつながっていてよかったと思う。	4.5
エ 西欧の事情と比べながら述べられているところがいいと思う。	4.5
オ 中国のことを加えて比較したら、わかりにくいと思う。	2.0
カ 「間」について感覚的には理解しにくいと思います。	3.5
キ 『空間の日本文化』を読んでいるうちに、中国のことに関して考えるようになっていく。	4.9

表1 『空間の日本文化』アンケート調査平均値1

非日本語専攻回答者（中国人）の結果を表2に示す。

質問項目	平均値
ア 読解が易しい。	2.8
イ 日本文化の理解が深まった。	4.5
ウ さまざまな分野（言語、自然、芸術、建築等）がつながっていてよかったと思う。	4.5
エ 西欧の事情と比べながら述べられているところがいいと思う。	4.3
オ 中国のことを加えて比較したら、わかりにくいと思う。	2.3
カ 「間」について感覚的には理解しにくいと思います。	3.2
キ 『空間の日本文化』を読んでいるうちに、中国のことに関して考えるようになっていく。	4.5

表2 『空間の日本文化』アンケート調査平均値2

今回五段階評価の結果から見ると、「日本文化の理解が深まった。さまざまな分野（言語、自然、芸術、建築等）がつながっていてよかった。西欧の事情と比べながら述べられているところがいい」という項目の評価が高かったことがわかった。逆に、「読解が易しい」という項目の評価が低かったのは、読解が難しいと思われるということになる。そのため、『空間の日本文化』という良い内容を利用して、分かりやすくすれば、日本文化への理解に役立つと考えられる。

また、問いカ（「間」について感覚的には理解しにくいと思いますか）においては、日本言語文化専攻出身者の平均値は3.5であり、非日本言語文化専攻出身者（中国人）の平均値は3.2である。それに対して、日本人回答者の平均値は2である。中国人回答者と日本人回答者の平均値の差が他の質問より目立った。これは「間」を感覚的な理解においては、中国人が日本人より苦手である表れであろう。これは「知識表現論」講義における発表に出た問題であった。「間」という概念については、『岩波古語辞典』に総括的定義が見られる。即ち、「連続して存在する物と物との間に当然存在する間隔の意。そこから休止の観念も出てくる。」である。この定義を踏まえてベルクは次のように述べている。「間」とは、意味をになった間隔の設置であると考えられる。「間」はもともと物と物とを分離しているのであるが、そこに意味を込めることにより、物と物とを結びつける機能を持つことになる。「間」はもともと空であるが、そこにそれを体験するものによって自由に意味を付与できるのである。そして「間」は水墨画や音楽や伝統舞踊にも現れる。ある中国人受講者の発表において、水墨画の注目点が話題になった。発表者は水墨画にある竹にしか注目していなかったことに、先生が不思議であった。何も無いところが一番肝心で、評価される原因だと言っていた。そして、発表者は「間」について言葉の意味がわかるが、感覚は持っていないと言っていた。中国人受講者は“理解できない”、“理解しにくい”という意見があった。ここからは、中国人に「間」を感覚的にはわかりにくい傾向があると思われる。

次に、順位をつける質問項目の結果を図14と図15示す。

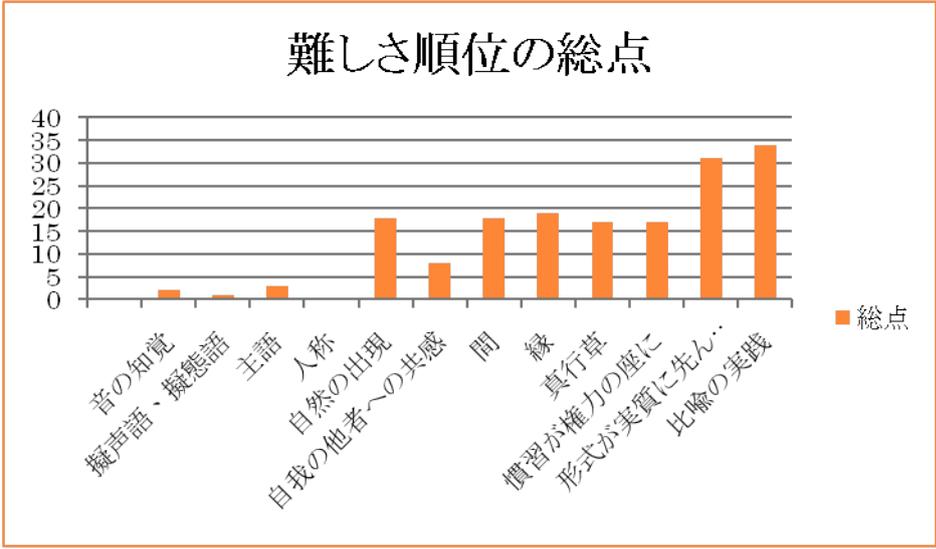


図 14 難しさの順位

この質問では、わかりにくいと思われるところと生活に役立つと思われるところの順位が明らかになった。図 14 に表すように、難しさの 6 位までの高い順は「比喩の実践」、「形式が実質に先んじる」、「縁」、「間」、「自然の出現」、「真行草」、「慣習が権力の座に」である。

そして、図 15 に表すように、生活に役立つ 6 位までの程度の高い順は「人称」、「主語」、「自我の他者への共感」、「擬声語・擬態語」、「間」、「比喩の実践」である。

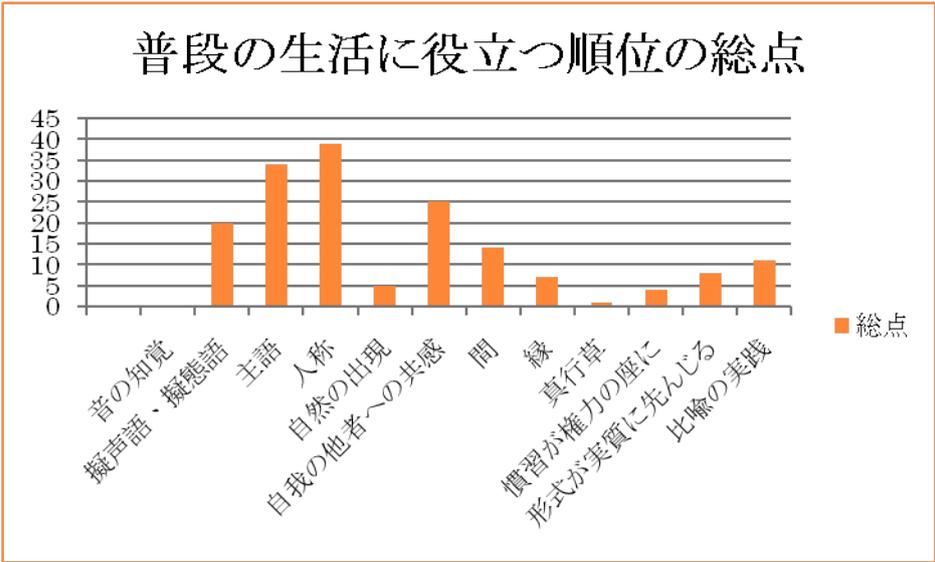


図 15 生活に役立つ順位

アンケートの結果から見ると、「人称」「主語」「自我の他者への共感」「擬声語、擬態語」といったところが、分かりやすいと思われている上で、普段の生活に役立つと思われている。難しさの順位と普段の生活に役立つ順位の分布が、ちょうど逆のようになっている。つまり、「言語」や「知覚」のようなよく生活に使われることは学習者にやさしいと思われ、「真行草」、「自然の出現」、「比喩の実践」のような抽象的論述が学習者に難しいと思われる。

しかし、「西欧語または中国語と比べた上で、日本語主語の特徴を述べてください。日本語の主語が持つ特徴は「自」「他」の区別と何か関係あると思いますか」という自由記述式の質問の答えに8人中一人だけその関係を述べている。ここから学習者たちは「主語」の部分が難しくないと考えているが、原理的理解が弱いと考えられる。(付録 B—3 参照)

アンケートの結果から、「主語＝言語上の主体」の部分は難しさの順位においては第10位にあり、分かりやすいと思われていることがわかった。そして、普段の生活に役立つ順位においては第2位にある。また、「間」の部分は難しさの順位が第4位にあるが、生活に役立つ順位が第5位にあることがわかった。今回は分かりやすいと思われるところから、他の空間へ飛んで体系的に理解させることとする。したがって、本研究におけるテキストブックは、精神的空間のわかりやすい「主語＝言語上の主体」から、物理的空間と社会的空間まで原理的・体系的理解をさせる。「主語＝言語上の主体」の原理を軸として、『空間の日本文化』を全部読んで、なるべく普段の生活と近い内容を選び、物理的空間と社会的空間から同じ原理が働いている部分を一つずつ取り出す。筆者の読解により「主体は適応可能である」という原理が精神的空間の「主語＝言語上の主体」、物理的空間の「内側を包む」、社会的空間の「内界と外界」という三つの部分に出現するので、この三つの項目を選択することとする。図16に示すように、ベルク氏の文化論によると、日本文化における主体性の特徴は類似的に精神的空間の言語、物理的空間の居住域の開閉性、社会的空間の人間関係に現れる。

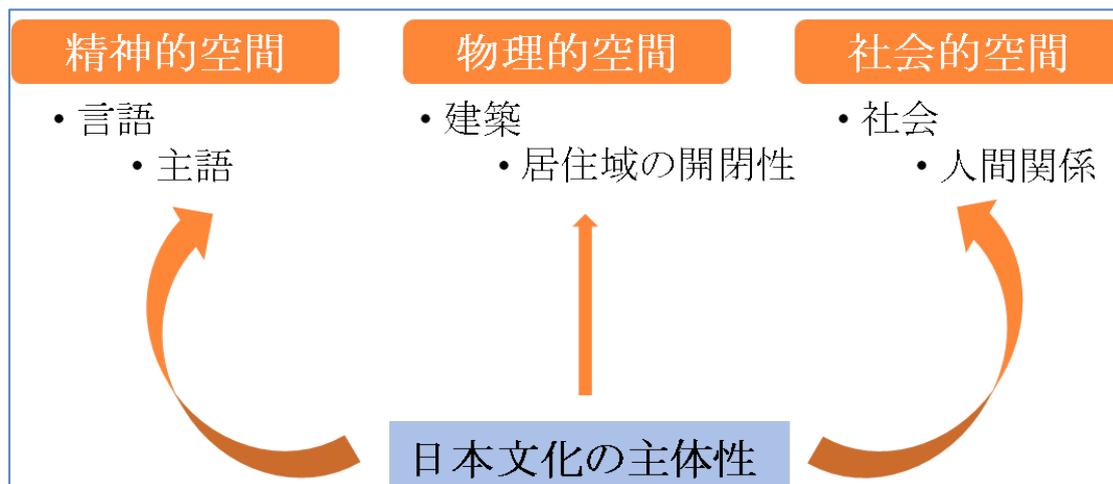


図 16 テキストブックの構成

3.4 テキストブック内容の設定と編集

以上に選択した項目に基づいて、テキストブックの内容としては、主語＝言語上の主体、家屋と屋外の開放性・閉鎖性＝建築上の主体、「内と外」＝人間関係上の主体という三つの部分を扱う。そして、この三つの部分に出た日本文化における事実・現象を説明し、原理により現象を解釈する。更に、三つの空間のつながりを指摘する。

日本文化における「主体性が適応可能である」という原理を軸として、三つの空間の現象を説明することによって、原理的体系的な見方を学習させる。つまり、精神的空間の言語に現れる主体（主語）、物理的空間の建築に現れる主体（居住域の開閉性）、社会的空間に現れる主体（個人と集団）という三つの点から日本文化の主体性を見ることによって、三つの空間にまたがる原理を理解し、体系的な理解を実現する。

テキストブックを分かりやすくするために、次の工夫を考えた。知識表現変換においては、図表や重要語句にカラーをつける。文章の考えや論述の流れを構造化・図解化した図で、内容を分かりやすく伝えるようにする。そして、原著にはフランス語や西欧の事例が入っているが、それらが中国人の学習者にとって親近感を持たないし、わかりにくいと思えるため、中国語の例、あるいは中国の事例に変える。そして、筆者自身の日本滞在経験を入れる。

テキストブックの目次は次のようになる。

基本的考え方	3
主体という概念について.....	3
各節の組み立てについて.....	4
主語＝言語上の主体	5
<u>日本文化における主語の現象について</u>	6
<u>原理による現象の解釈</u>	6
家屋と屋外の開放性・閉鎖性＝建築上の主体	8
<u>日本文化における家屋と屋外の現象について</u>	9
<u>原理による現象の解釈</u>	9
「内と外」＝人間関係上の主体	10
<u>日本文化における「うち」/「そと」の現象</u>	10
<u>原理による現象の解釈</u>	12
まとめ	13

テキストブックの内容について、主語の部分は次のようになる（P28～P30 途中まで）。全テキストブックは付録 C に示す。

一、主語＝言語上の主体

まず、上の「主語＝言語上の主体」のテーマに注目してもらいたい。主体が言語上に現れる場合は、文法上の主語になるということを、ここで強調しておきたい。

この節の文章の構造（論述の流れ、要素間の関係構造）を図1に表現してみる。この図の意味するところは次の通りである。

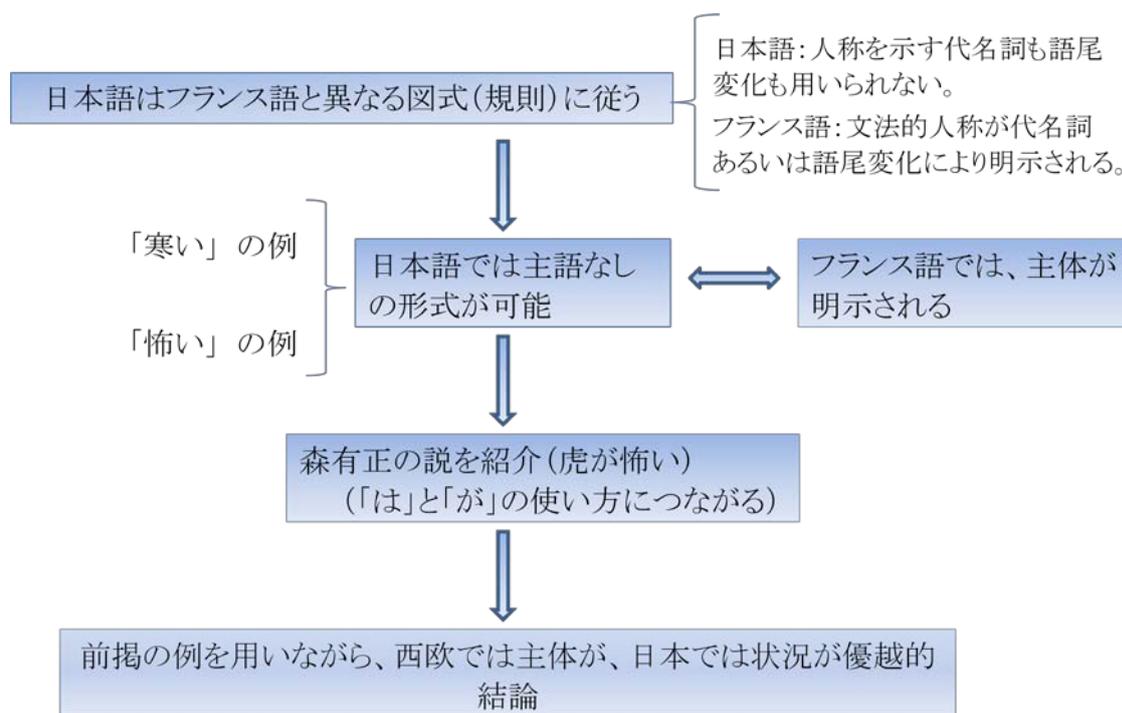


図1 本項「主語＝言語上の主体」の概要図

まず、日本語とフランス語は異なる構図に従って機能していることを提示する。つまり、日本語では、人称を示す代名詞も語尾変化も用いられない。フランス語では、動詞の主語である文法的人称が代名詞または語尾変化によって明示される（人称変化で、誰が主体（主語）なのかが分かる）。次に、ベルクは日本語では主語なしの形式が可能で、フランス語では、主体（主語）が明示されることを説明するために、「寒い」と「怖い」の例を挙げている。それから、森有正の説を紹介し、「虎が怖い」という文章の言い方を例として、日本語の主体と対象について述べられている。最後に日本文化では主体と対象が、ある共通の雰囲気、同時に参与しているのに対して、西欧では、主体は対象に対しある距りを設ける、即ち、日本は状況が、西欧は主体が優越的である結論をつけている。

日本文化における主語の現象について

「好きです」、「寒い」、「虎が怖い」というセンテンスの言い方について述べる。

最初に、「好きです」については、ベルク自身が日本の戦争映画の一シーンに驚いたことを挙げている。つまり、危険が迫ってきたにもかかわらず、持ち場を離れたくないという看護婦がいる。医者が理由を尋ねると、彼女はしばらく黙っているが、「好きです」と言う。このまま、中国語に訳したら、「喜欢/爱」としかならないであろう。誰が誰を愛しているかを示すような主語、目的語はいっさいない。何年間日本語を習った人には、そのような言い方に慣れているかもしれないが、習い始めていたベルクにカルチャー・ショックだったそうである。つまり、日本語で、「あなたが、何かを、もしくは誰かを、欲する、恐れる、愛する……」と言う時、主語（文法上の主体）は「あなた」ではなく、あなたの感情の対象である。「お酒が好きです」（中国訳は「我喜欢酒」、主語、述語、目的語の通り）では、主語は「酒」になる。

次に、「寒い」という言い方については、

i 英語では、I am cold、中国語では「我好冷」：「(自分の感覚として) 寒い」

ii 英語では、It is cold、中国語では「今天天气真冷」：「(天候について、周囲などが) 寒い」の二つを区別する。もちろん、中国語では「真冷啊」（主語なし）とも言うが、日本語では主語なしの形「寒い」のほうが一般的で、主体（主語）をつけて言わないところに注目してもらいたい。

最後に、「虎が怖い」というセンテンスから日本語の特徴を見ていこう。中国語では、「我害怕老虎」「老虎是可怕的」「老虎令我害怕」というような言い方をするが、日本語では、怖い感じをする主体が文法的な主語となるのではなく、「虎」という恐怖の対象が文法的な主語となっている。

原理による現象の解釈

以上の例からみると、日本語では主語・述語というパターンが普遍的なものではないことが分かってくる。森有正氏は、このパターンが日本語にはなじまないことを示した。例えば、日本語専攻の学生たちは、日本語を習い始めた最初の頃、自己紹介する場合、「私は〇〇です」と言いがちだろう。それがまだ日本語に慣れていないようで、「私は」を言わないほうがいいと先生に教わっただろう。また、私自身にあったアルバイトの経験を話したい。レジをしている私は、すこし暇だと思ってかご整理に行こうとしたら、先輩に「するわ」と言われた。それは、「私がするから、あなたはしなくてもいいよ」というような意味で捉えたらいいと思う。しかし、「私」と「あなた」をつけてそういう言い方をしたら、あの先輩の主体の境界は私とははっきり区別されるような感じになる。日本文化では主語をはっきり言わないのは、主体は他人と

はっきり区別されたくないと思われる。日本語になじまないと、急に「するわ」と言われてたぶん漠然になると思う。中国人からみれば、「做」だけになるので、誰が何をするかはまったく明示されていない。

日本文化における主体と対象が、ある共通の雰囲気、そこに付随して生じる場面の雰囲気に、同時に参加しているの、「寒い」と「虎が怖い」を言い、主語を言わなくても、話し手と聞き手にはわかる。西欧語または中国語での言い方から、西欧語または中国語の場合は主体が先行的、場面が客観的であることはわかる。つまり、主語を示す代名詞の明示により主体は対象に対する距離を設けることになる。それに対して、日本文化における主体はお互いに共感でき、主体の境界がはっきり区別されないから、主語の明示をしなくても良い。または、お互いに共感できるために、主体の境界がはっきり区別されないために、明示しないということも考えられるであろう。引き続きテキストブックのまとめの一部を示す。

そして、テキストブックのまとめ構図は図 13 のように示す。「主体は適応可能である」という原理は言語、建築、人間関係に類比的に現れると、「主語なしの形が可能である」、「伝統的な日本家屋では寝室を本当に他から孤立させようという精神的欲求もないし、物理的にも不可能である」、更に、「主体と、それが所属する内側世界の間」に起こる『同化作用』というような現象になる。そして、原理が言語、建築、人間関係の分野の間に比喩的に移行している。

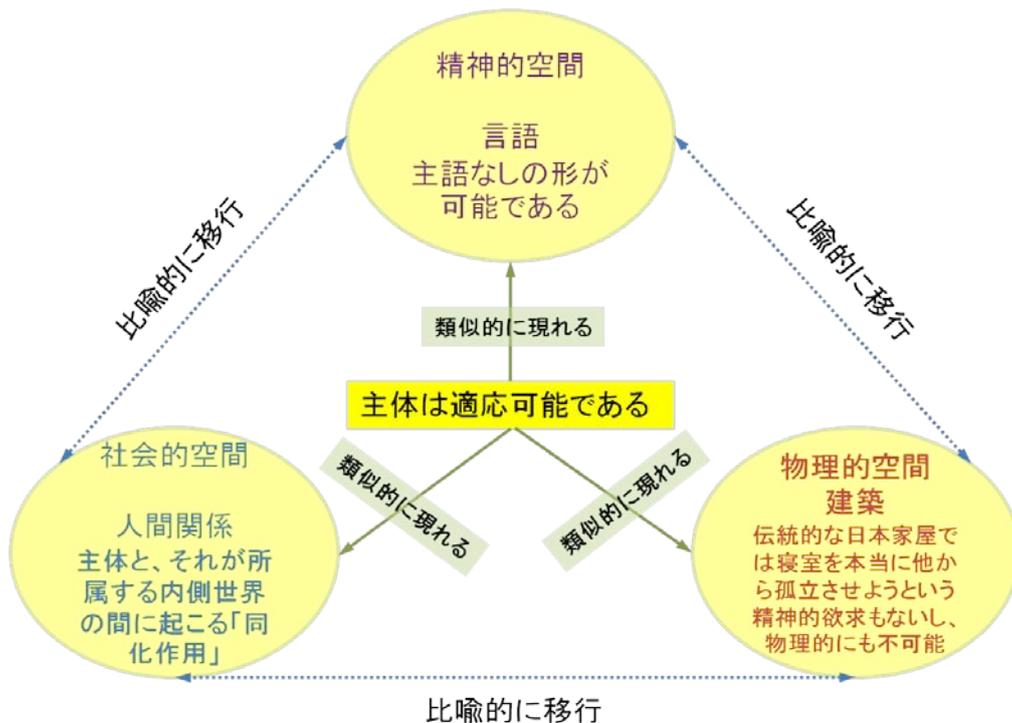


図 13 テキストブックのまとめ構図

第四章

テキストブックの評価実験について

4.1 実験内容

作成したテキストブックの有効性を調べるために、中国人の日本語文化学部出身者の16人を対象として、テストとアンケート調査を行った。方法としては、16人の実験者を二組に分ける。テキストブック組は本研究で作成したテキストブックを実際に勉強してもらい、ベルク文章組はベルクの『空間の日本文化』を勉強してもらう。その後、それぞれにテストとアンケートを回答してもらう。二組のテストの結果を比較する。テストの目的はテキストブックの学習者の原理的・体系的理解度を調べることにある。アンケートの目的は本研究のテキストブックに関して全体的イメージとコンテンツの評価をもらうことである。

学習内容を同じとするために、実験者に実際に勉強してもらう際に、テキストブックと同じ内容にあたるベルクの本をベルク文章組に読ませた。即ち、「まえがき」、「主体は適応可能である」、「主語＝言語上の主体」、「内側を包む」、「内界と外界」という五つの部分を勉強してもらうこととした。

実験の手順は、図17に示す通りになる。

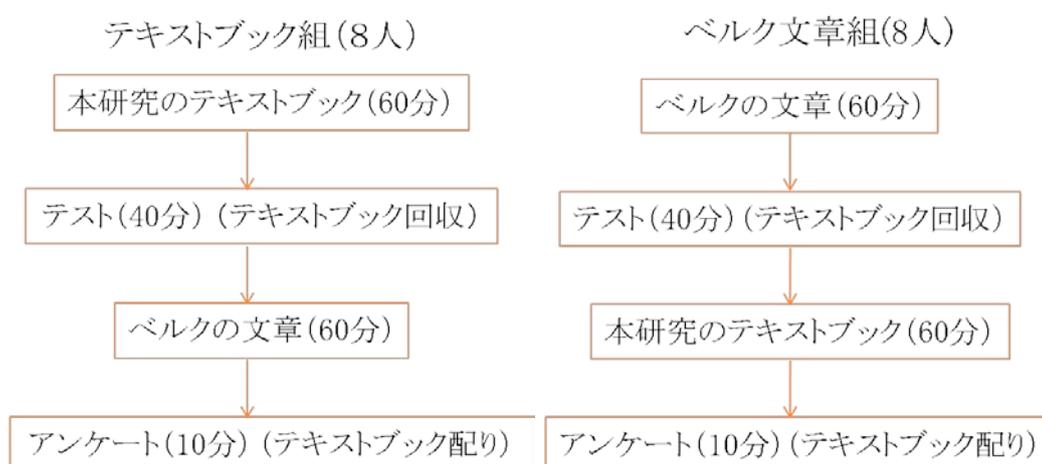


図17 テキストブックの実験手順

テキストブック組は最初に、60 分間本研究のテキストブックを勉強する。それから、40 分間のテストを受ける。テストが終わってからベルクの文章（「まえがき」、「主体は適応可能である」、「主語＝言語上の主体」、「内側を包む」、「内界と外界」五つの部分）を 60 分間勉強する。最後に、アンケートを回答する。ベルクの文章を勉強する時間と本研究のテキストブックを勉強する時間を一緒に設定している。アンケートの結果は両テキストを読んだ上での結果となる。アンケートを回答する際、テキストブックを見られるようにしている。

ベルク文章組は最初に、ベルクの文章（「まえがき」、「主体は適応可能である」、「主語＝言語上の主体」、「内側を包む」、「内界と外界」五つの部分）を読んでもらう。それから、本を回収してテストを行う。そして、テストが終わってから本研究のテキストブックを勉強してもらい。最後に、アンケートを回答してもらい。時間は、テキストブック組と一緒にある。

4.2 テストとテキストブックに関するアンケート の位置づけ

テストの質問形式の設定にあたって、選択式であれば選択肢が回答者に影響を与える可能性がある。自由記述式は回答者の思ったままに書いてもらえるので、更に理解度がわかると考えたので、自由記述式の形式で作ることとした。テストの内容は四つの自由記述式質問からなる。その中では、「主語＝言語上の主体」、「内側を包む」、「内界と外界」三つの項目について原理を使って説明させた質問をする。この質問の目的は学習者の原理的理解度を測ることにある。そして、三つの項目の関係に対して一つ質問する。この質問の目的は学習者の体系的理解度を測ることにある。

テストにおいて次の内容を質問した。

- 1, 日本語にはよく主語が省略（省略というより元々なくてもお互いにわかり合う）されるということが多くの人に知られている。西欧語または中国語と比べながら、原理を使って説明してください。
- 2, 西欧では壁で仕切られたいくつかの部屋が作られ、頑丈な扉がはめられ、個人の寝室なら錠で閉められるようになる。これに反して、伝統的日本家屋では、部屋と部屋を分けるのは壁ではなく、横滑り、取り外しも可能な襖（ふすま）でできている。この現象について、原理を使って説明してください。
- 3, 日本文化について、「内と外」の概念がよく話に取り上げられる。ベルクによると、「うち」は成員以外の人間とのあらゆる関係における、多数の集団的「わたし」（学校のクラス、会社等）に適用できる。つまり、「わたし/わたしたち」「（わたしの）家（うち）」「（わたしの）内側世界＝所属世界」という三つの概念が同じ言葉（うち）で示されることができる。この現象について、原理を使って説明してください。（ヒント言葉：同化作用、主体）
- 4, 三つの部分（主語、家屋の閉鎖性、うちとそと）は、関係があります。その関係を述べてください。

アンケートの内容は五段階評価の質問9個と自由記述式の質問1個からなっている。五段階評価において原理的理解できた程度、体系的理解できた程度、内容の理解しやすさ、各節の概要図の役立つ程度、まとめ構図の役立つ程度、中国事例の役立つ程度、筆者自身の日本滞在経験の役立つ程度、カラーの図表や重要語句の役立つ程度、本研究のテキストブックの形で日本文化を勉強していきたい程度について調べた。そして、テキストブックに関して意見や提案を書いてもらった。

アンケートの質問項目は表3に示すようになる。

1	日本文化への原理的理解が深まることができましたと思いますか。
2	日本文化への体系的理解が深まることができましたと思いますか。
3	このテキストブックの内容は理解しやすいと思いますか。
4	各節の概要図がテキストブックの内容理解に役立つと思いますか。
5	まとめ部分にある図3（まとめ構図）がテキストブックの内容理解に役立つと思いますか。
6	中国の事例がテキストブックに含まれているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。
7	筆者自身の日本滞在経験がテキストブックに含まれているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。
8	図表や重要語句にカラーを付けているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。
9	このテキストブックの形で日本文化を勉強していきたいと思いますか。

表3 アンケート質問項目

4.3 採点方法と採点の例

4.3.1 採点方法と採点基準

テストは自由記述式の質問であるので、回答者の答えを読んで、理解したレベルを見て、採点を行う。全員の回答を質問毎にカテゴリーして整理することとした。質問毎に10点満点として採点する。一回目で回答に一通り見て、回答の全体のレベルを頭に入れておく。二回目は回答毎に採点する。それから、採点基準を作り、採点基準に基づいてもう一回採点を行う。最後に、一人毎に得点を計算する。

テストの採点基準は次のようになる。

1. ベルクの文化論と関係ない場合と全然理解していない場合は、0点とする。
2. 問い1－3までは、原理的理解を図るので、現象について述べ、原理に触れていない場合は、5点以下とする。そして、現象の理解度を見て1点から5点まで採点する。この中で、更に体系的理解の見えた回答があり、2点プラスする。
3. 問い4は三つの分野をまたがって質問して、体系的理解を図るので、体系的に述べているように見えなければ、5点以下とする。
4. 本研究を用いるベルクの原理は「主体は適応可能である」であるため、主体性について述べていたら、つまり、「主体」「個人性」「個人意識」といったキーワードが入っている場合は、3点プラスする。更に、「適応」「共感」といった言葉が出ている場合、2点プラスする。

アンケートの採点方法としては、前の『空間の日本文化』についてのアンケート調査と同じ方法を取る。つまり、プラス方向通りに5点－1点を付ける。それから、質問毎の平均値を計算する。

4.3.2 回答と採点の一例

テストの問い1「日本語にはよく主語が省略（省略というより元々なくてもお互いにわかり合う）されるということが多くの人に知られている。西欧語または中国語と比べながら、原理を使って説明してください。」の回答を以下のように採点した（付録D－3参考）。テキストブック組の回答をA1からA8まで整理番号をつける。ベルク文章組の回答をB1からB8まで整理番号をつける。

A1	日本語では主語、述語は一般的ではない。例えば「好きです」西欧語また中国語では、主語また目的語は分かりません。ただ述語だけ分かります。日本語では、対象が主体で省略できる。もう一つの例は、I am cold. 「我很冷」、日本語では「寒い」でいいです。日本語で先に場や状況、西欧語また中国語は主体、主語が先んじている。日本語でお互いに共感できるように、他人と区別されるのは好ましくありません。主語や主体をつけると他人の位置をはっきりとさせたいの場合です。
(10点)	

A2	日本語では「好きです」「寒い」というように主語が省略される言い方がよく目にする。中国語には主語が省略される例もあるが、日本語ほど多くない。例えば「好冷啊」とか、でも「喜欢」だけで文になれない。それは日本語と違う。西欧語では主語を明確に示される。代名詞もそうです。「It's cold」「I feel cold」はその一例である。つまり、日本語では主語、代名詞も一切使っていない、「主語+述語」という西欧人にとってとても基本的な型が日本語に適切ではないということになる。
(5点)	
A3	西欧語というと、私にとって英語だけ知っています。英語の場合は、主語が省略する場合はとても少ないです。命令の文以外には、ほとんどないとかんじます。そして、英語は語尾の変化があります。誤解させることが少ないと思います。中国語の場合は、主語省略の場合が英語より多いと思います。もちろん、この省略される場合は、日本語のように、集団内部（中国文化を了解する人たち）に対して、わかりやすいと思います。そして、中国語は日本語と同じように語尾変化がありません。
(5点)	
A4	日本語はほかの外国語と比べ、よく主語が省略されるという。ここで中国語と比べて説明する。道で人と会ってあいさつする時、中国語では「你好」「你好吗」とする。この中で「你」は主語で、それを省略すると「好」「好吗」になって、少しくだけたあいさつになってしまう。あいさつ用語としてあまり使われない。それに対して、日本語では「こんにちは」「お元気ですか」といい、主語「あなた」を省略する。
(4点)	
A5	日本語は共通の雰囲気の主語を使わなくても、お互いに分かり合います。主語は人称代名詞ではなく、主な状況が主語です。中国語ははっきりした主語を使っています。例えば、レジで暇な時、かごを整理しようと思ったら、先輩に”するな”と言われました。”私がやるから、あなたはしなくてもいいよ”という意味です。言語が省略されましたが、その場合、意味が通じます。中国語に変換するなら、”不做”だけで、誰でも分かってくれないと思います。
(6点)	

A6	日本語は常に主体と対象をある共感を持つ境界の中に入れ、結果として、表現の中に主体がなくてもその共感の作用でお互い通じ合うことができる。また、対象語を主語として位置づけるという文法的特徴もある。西欧語と中国語は主体と対象を区別して、きちんと表現する考えが強い。その根本的な原因は西欧と中国は個人性を強調し、周囲の状況から主体を強調しようとする理念である。つまり、日本では、主体は常に状況に適応していて、状況を強調する傾向があり、西欧と中国は常に主体を状況から区別して強調し、主体重視である。
(10点)	
A7	西欧語は普通主語を省略しない。主語を省略しないということからから見れば、西欧人は個人性が割りと強い。自己と他人の区別を強調する。中国語の場合は、主語を使う頻度は日本語と西欧語の間にあると思う。中国語は個人を言う時、特別に強調しなくてもいい。しかし、相手を言う時に、対象性を強調する。これは中国語の語尾には授受変化がないからだと思う。対象を明示しないと、指向するのが不明確になるかもしれない。
(9点)	
A8	日本語は状況的で、西欧語は主体的である。日本語で話す時、対象に着目するより、その境界を注目する。
(8点)	
B1	日本語の主語＝主体であるので、省略しても分かる。中国語は主語がないと文の意味が分からない場合が多い。
(1点)	
B2	日本語で「愛している」、英語で「I love you」。中国語で「我爱你」。英語と中国語いずれも”o+v+s”の形です。日本語では誰が誰を愛しているのかははっきり言いません。「寒い」とかも温度が低いなのか、人の感覚で寒いのかもはっきり言いません。その場合は二つの意味、両方とも伝えます。中国語では「天気が寒い」のか、「私は寒く感じてます」か、どちらかははっきり言います。
(2点)	
B3	日本語は状況を重要視する言語なので、主語が省略された場合でも、お互いに意味を理解できるのだ。西欧語または中国語は状況より個人が重要視される言語なので、言語が省略される場合が少ないと思う。
(8点)	

B4	(3点)	日本語は主語が省略されても通じることが多い。この点から見れば、中国語の場合や西欧語（英語）の場合とは違う。西欧語（英語）の場合、例えば、I love you のように、主語がいつも使って話している。同じように、中国語の場合もこの文を訳したら、「我爱你」という。普通は主語の「我」が省略されないで使う。でも、会話する時や電話する時など二人だけの対話なら、相手のことを表す「你」という主語はよく省略される。
B5		中国語には主語が省略されることがあるけれど、日本語ほど少ないと思います。また西欧語には一般的に省略されないと思います。日本語には話している時に、主語が省略されるから、相手に同じ立場あるいはチームについて、したしく感じさせる。
B6	(0点)	西欧語または中国語は主語を省略しない。
B7	(7点)	日本語の主語は対象に対して異なります。「天気が寒い」と「私が寒い」。その対象はそれぞれ「天気」と「私」です。ですから、主語を省略して「寒い」とよく言われます。すなわち、日本語の主体は適応可能ということです。
B8		飲食店で注文する時、「さけです」と一言で注文することが多い。「私はさけを注文する」の私という主語を省略する。感情表現においても「好きです」と表現するのが普遍である。中国では必ず「我喜欢你」のように、主語「我（私）」を使いますが、日本語ではよく省略する。これは、即ち、主体は適応可能である。日本センテンスの原理によるものだと思う。
	(8点)	

第五章

評価の結果と考察

5.1 テストの結果と考察

以上の採点基準に基づいて採点したテストの結果を表4に示す。

	得点		得点
A1	38	B1	9
A2	31	B2	5
A3	24	B3	29
A4	20	B4	11
A5	28	B5	12
A6	40	B6	9
A7	30	B7	7
A8	30	B8	10

表4 各参加者の得点

表5から分かるように、ベルク文章組の平均点が11.5であることに対して、テキストブック組の平均点が30.1に達し、ベルク文章組より18.6点高くなっている。そして、表4に示した二組の点数でT検定を行った。T検定の結果($T(14)=5.31, p<0.01$)より、二組のテストの平均点の差に有意差があることが分かった。

そして、質問毎に平均点の結果を見れば、表5のようになる。

	問い1	問い2	問い3	問い4	得点
テキストブック組 平均点	7.13	8.63	6.25	8.13	30.1
ベルクの文章組 平均点	4.25	4.00	2.73	0.88	11.5

表5 二組のテスト結果

問い1は平均点から見れば、テキストブックを学習する組は 7.13 で、ベルクの文章を学習する組の 4.25 より大きいことがわかった。問い 2 に検定を行った結果 (T(14)=3.82, p <0.05) より、家屋の閉鎖性における原理的理解に有意差が明らかになった。問い3の結果 (T(14)=2.85, p <0.05) より、「うちとそと」の人間関係における原理的理解に有意差があることもわかった。そして、問い4の結果 (T(14)=7.13, p <0.01) より、体系的理解においても差があることが分かった。ここから本研究のテキストブックは日本言語文化学習者たちに原著『空間の日本文化』と比べて原理的・体系的理解において有効であった。

問い4は「三つの部分（主語、家屋の閉鎖性、うちとそと）は、関係があります。その関係を述べてください」という問題であり、得点の差が大きいことから、ベルクの文章は体系的にわかりにくいと推察される。実は『空間の日本文化』はこの三つの部分の中で「主体性」について指摘してはいる。そして、「まえがき」でベルク氏の文化モデルについて「日本的空間性のそれぞれの面はみないくつかの総合原理に従っている。そして、同じ原理は、それぞれの分野において、類似（アナロジー）的に現れ、隠喩（メタファー）的に一つの分野からその他の分野へ移動するのである。この本の中で、私は、いくつかの具体的な例をもとにして、日本的空間のアナロジー的な同一性を体系的に捉えようとした。」などと述べている。しかし、今回のテストの結果から見ると、学習者に短時間ではそれらを読み取れにくいと考えられる。そして、次の意見を学習者から得ている。即ち、“文章が生硬である” “フランス人読者には周知の事柄でも中国人読者になじみの薄い事柄である” “論述は論理的に欠ける” である。

5.2 アンケートの結果と考察

テキストブックに関するアンケートの結果は表6に示すようになる。

質問項目	平均点
1 日本文化への原理的理解が深まることができましたか。	4.56
2 日本文化への体系的理解が深まることができましたか。	4.31
3 このテキストブックの内容は理解しやすいと思いますか。	4.56
4 各節の概要図がテキストブックの内容理解に役立つと思いますか。	4.44
5 まとめ部分にある図3（まとめ構図）がテキストブックの内容理解に役立つと思いますか。	4.50
6 中国の事例がテキストブックに含まれているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。	4.69
7 筆者自身の日本滞在経験がテキストブックに含まれているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。	4.63
8 図表や重要語句にカラーを付けているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。	4.69
9 このテキストブックの形で日本文化を勉強していきたいと思いますか。	4.19

表6 アンケートの結果

アンケートの結果から、テキストブックは「図表や重要語句にカラーを付ける」「中国事例の追加」「筆者自身の日本滞在経験の追加」「まとめ構図」「概要図」の評価が良かったことがわかった。そして、内容の理解しやすさは 4.56 の良い評価を得ている。

アンケートの最後に、「本テキストブックに関して、ご提案やご意見などがあれば、ご自由にお書きください」という質問を設定し、回答者にテキストブックについて自由記述の形で評価してもらった。まとめてみると、次のようなコメントがあった。

「原著と比べて日本文化への理解をしやすくなった」「原著のフランス語の例を中国語の例に変えるのがよかった」「筆者の日本滞在経験や中国事例をもっと入れた方が理解に更に役立つ」「図表が概括的理解に役立つ。概要図をもっと改良できる」「「玄関」「縁」の内容も追加したらおもしろい」「カラーの部分は赤色とオレンジ色が両

方あるが、意味が気になる」となる。これから、コメントに基づいて更に図表を改良したり、表現を分かりやすくしたり、「間」「玄関」「縁」などを追加して内容を展開したりするような課題が考えられる。

第6章

結言

6.1 まとめ

本研究では中国人日本語学習者向けの教材について検討した。

現在中国では日本語学習者数が多く、日本語教育における「教材不足」の問題があるという背景に基づいて、中国の高等教育において使われている日本文化の教材についてレビューした。それらを『空間の日本文化』と比べた上で、学習者たちに重要である文化への原理的・体系的理解においては欠けているのではないだろうかと考えた。

したがって、学習者たちの原理的・体系的理解を深めるために、ベルク氏の『空間の日本文化』をベースとして中国人日本語学習者向けのテキストブックを作成することとした。『空間の日本文化』から項目を選択するにあたって、「知識表現論」授業で受講者を対象としてアンケート調査を行った。

次に、アンケートの結果を踏まえてテキストブックの位置づけとコンテンツを工夫した。アンケートの結果から、「主語＝言語上の主体」の部分は難しさの順位が第10位にあり、分かりやすいと思われている上で、普段の生活に役立つ順位が第2位にあることがわかった。そのため、今回のテキストブックは分かりやすいと思われるところから、他の空間へ飛んで体系的に理解させることとした。つまり、精神的空間のわかりやすい「主語＝言語上の主体」から、物理的空間の「家屋の開閉性」と社会的空間の「うちとそと」まで原理的・体系的理解をさせる。

そして、テキストブックの有効性を調べるために、評価実験を行って、テストとアンケートによって評価をもらった。テキストブック組はベルク文章組と比べてテストの点数があがった。アンケートの評価も高い評価となっている。ここから、テキストブックは学習者の原理的・体系的理解に役立ったことがわかった。そして、「図表解」、「カラー付き」、「中国事例の追加」、「著者自身の日本滞在経験の追加」のような工夫が良い評価をもらえた。以上より、本研究で作成した日本文化の原理・体系的理解を支援するテキストブックは日本語教育へ一役買うことが期待できる。

6.2 今後の課題と展望

今後の課題としては、まず、テキストブックの内容においては、今回原理を一つ、項目を三つ扱った。『空間の日本文化』のアンケート調査から、「間」の部分は難しいと思われているが、普段の生活に役立つと思われていることが分かった。そのため、今回の成功に基づいて、今後「間」のような難しく、抽象的な項目と他の原理にもチャレンジしたい。コンテンツにおいては、テキストブックを基にして、ネットワーク上の関連サイトにリンクを張り、デジタルブックに編集することができる。評価実験においては、実際に授業で本研究のテキストブックを教科書として使ってもらうことによって、評価をもらうことが考えられる。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、誠に多くの方々にご協力、ご支援をいただき、この場をお借りして、お世話になった方々にお礼を申し上げたいと思います。

まず二年間にわたり、研究の進捗から就職活動まで誠にいろいろとお世話になった主指導教官を務めた杉山公造教授に心から感謝いたします。研究においては必要な知識や心得を熱心な指導及び充実した研究環境を提供してくださいました。就職活動では“それも貴重な勉強だと思うので、気が済むまで頑張ってください”などの励ましを今も覚えています。非常に残念なことながら、修論提出数ヶ月前に杉山教授は入院され、主指導を拝受できない状態となりました。早く体調の回復を望む毎日です。

本研究を前述の事情より、主指導教官が由井菌隆也准教授への変更となりました。ここで、研究の方向性や研究の論理性について示唆し、論文の執筆に終始一貫して熱心な丁寧なご指導、ご意見をくださった由井菌隆也准教授に心から深く感謝の意を表します。途中で由井菌先生のご指導をいただいているので、実は本研究は由井菌先生の研究分野とずれています。それにしても、由井菌先生からは常に私の立場での様々なご配慮をいただきました。そして、大変お忙しい中でも、いつも私の質問に親切にまじめに対応してくれています。短い二ヶ月あまりであるが、誠にいろいろとお世話になっており、良い勉強となりました。改めて心から感謝いたします。

本研究に関して貴重なご教示を頂きました國藤進教授、本多卓也教授、Ho Tu Bao教授に衷心より感謝の意を表します。

また、副テーマ指導教員である羽山徹彩助教授から、数ヶ月にわたり副テーマである対話的なWeb デジタルブック構築のための基礎技術の習得をご指導いただき、心から感謝の意を表します。また、中間審査委員であった國藤進教授、橋本敬教授からは、本研究に関する貴重な助言をしていただいたことに感謝の意を表します。

そして、研究室配属以来、研究への助言を含め、様々な支援をしてくださった小倉加奈代助教及び知識講座の皆様には感謝いたします。

また、お忙しい中時間を割いて本研究の実験にご協力いただいた皆様に感謝します。最後に、本学進学のチャンスを与えてくれた中国大連民族学院の先生方々と家族に感謝します。

ありがとうございました。

参考文献

- [1] 海外日本語教育機関
<http://www.jpfbj.cn/down/113001.pdf>
- [2] 有馬淳一, 岩澤みどり, 「中国における日本語教育活動の概況—現職教師研修と学校外教育活動を中心に」, 日本語教育学会 2002 年度調査研究報告 (2003)
- [3] 荒木博之, 日本語から日本人を考える, 朝日新聞社(1980)
- [4] 森山新, 日本語教育における文化の重要性, お茶の水女子大学 (2003)
- [5] 箕浦康子, 文化のなかの子ども, 東京大学出版会 (1990)
- [6] 柴田庄一・山口和代, 日本語習得における人間関係の認知と文化的要因に関する考察—中国人および台湾人留学生を対象として—, 言語文化論集, 第XXIV巻, 第1号 (2002)
- [7] オギュスタン・ベルク, 空間の日本文化, ちくま学芸文庫 (1994)
- [8] 杉山公造, 2010 年度「知識表現論」講義用資料(2010)
- [9] 盛山 和夫, 社会調査法入門, 有斐閣ブックス(2004)
- [10] オギュスタン・ベルク, 日本の風土性, NHK 人間大学(1995)
- [11] 苑崇利, 日本概観, 外文出版社(2005)
- [12] 龙 宏, 传统住居空间—“院落空间”探析, 重庆建筑大学学报(2004)
- [13] 丁末, 中国的围墙文化(2009)
- [14] 徐平, 围墙与圈子, 人民论坛(2010)
- [15] 阎云翔, 差序格局与中国文化的等级观, 社会学研究(2006)
- [16] HSIAO-TUNG FEI, PEASANT LIFE IN CHINA(1939)
- [17] 邱永漢, 中国人と日本人、中公文庫(1996)
- [18] 费孝通, 江村经济, 上海世纪出版集团 (2007)
- [19] 费孝通, 乡土中国, 人民出版社 (2008)
- [20] オギュスタン・ベルク, 日本の風景・西欧の景観, 講談社現代新書(1990)
- [21] 島崎 哲彦, 社会調査の実際—統計調査の方法とデータの分析—, 学文社(2000)
- [22] 王秀文, 黄英兰, 日本の言語とコミュニケーション教程 (2006)
- [23] 王秀文, 金山, 山鹿晴美, 日本社会文化読解, 大連理工大学出版社(2004)
- [24] 水内 宏, 李潤華, 「日本事情」教育における新視点と教材開発, 千葉大学教育学部研究紀要, 第 54 卷(2006)
- [25] 辻 新六, 有馬 昌宏, アンケート調査の方法—実践ノウハウとパソコン支援—, 朝倉書店 (1987)

付録 A

知識表現論発表とビデオの要点

1-1-2 擬声語、擬態語

1-1-3 主語＝言語上の主体（この節は筆者の記憶です）

J1：フランス語には、男性名詞と女性名詞の区別がある。

日本の方：「寒い」というのは、別に「天気が寒い」か、「自分が寒いと思う」か、どっちでもいいと思うから、単に「寒い」と言う。（中国もそう言う場合もある）

○自己紹介の時の主語について（教え方につながる）

中国人の日本語学習者たちは最初日本語を勉強した頃、自己紹介する場合、よく「私は〇〇です」と申します」と言いがちです。その時、先生たちは「私は」を言わない方がもっと日本的だ、と教えてくれた。（中国語での自己紹介は必ず主語をつける）

中国人は日本語の主語に関して「省略」の言葉を使っているのに対して、日本人は「省略」というより、もともとはないと主張したい。

杉山先生：ここでは「省略」ということがもっとグローバルの基準がいる。

○中国人の学習者には日本語を勉強する時、「は」と「が」の使い方に難しく感じる。

C1：この授業を通して中国のことを考えている

1-1-4 人称＝人格の表明

人称表現が決定的に異なる — 世界観の違いを反映

西洋語の場合

日本語の場合

西欧語は自己中心言語、日本語は場所中心語

○人称の敬語における中国語と日本語の比較

J2：中国語には敬語があるのか？日本語の意味では、〇〇さんとか。

C2：昔の「貴様」はいい意味。“您，你”の区別。

C3：「さん」の代わりに“老李”“小李”“李经理”という。

C4：李先生，李小姐 (miss, madem)

C4さんの発表

言葉のレベルの理解することと本質を読み取るとはかなり距離がある。

三項構造

日本語は、他の手段を用いる。

- 1、 代名詞と似ている代名詞ではない別の言葉を用いる。
- 2、 第二人称になると、人稱をはっきり目指さずにただ喚起する言い回しに頼る。

J3：「僕」という言葉は明治時代、夏目漱石の小説に現れた。英語の toilet, WC

崩れたり、変わってきたり、

言葉の持っているイメージが変わっている、使い方とか変わる

J1：人物、人稱 王さんは明確、烏蘭さんは結論？そういう文化？日本文化はどういう？

場面によって対応 **対応性**

J2：どんな場合「俺」「私」を使うかわかる？

杉山先生：**環境が決まらなないと、言葉が決まらな、発生できない。西欧の I, YOU、HE とずいぶん違う。**

中国語の“我，你”（您）交換できる。“俺”方言か？農村部まだ使っている。

J3：「俺」を使っている人は「我」使うのか？

C5：日本は役職名とか使うけど、フランス語では役職名とかつけて呼ぶのでしょうか？言わなかったような気がする。相手の名前や tu と言ってた。

C1：中国のことに気がついた。以前、考えることができなかった。

C3：西欧語と日本語の違いがわかった。日本語にはそんなに第一人称があるのに初めて気がついた。

1-1-5 自然の出現

副読本

宇宙開闢論：誕生・生育タイプと天地創造タイプ

西欧は論理を、日本は経験律を重んじる

主体の自律性と他律性— 荒木博之に基づく「受身表現」の解釈

西欧文化と日本文化

数学における証明の意味

日本人の科学者は「具体的例を通して一般的定理が成り立っていることを改めて納得する」プロセスが必要であるように思う。

宗教、哲学、科学

P84 図 1.1.5.4 について

J3：フランスは**理屈が一番大切なもので、日本は理屈を無視に、現実合理的**というのは、神様（ロゴス）があつて、人間を作っていく

長くて難しい。

1-1-6 自我の他者への共感

副読本

日本語における「自我の延長」の例

西欧語における「自我の延長」の例

自我の明確さ・不明確さの度合いの比較

土居建朗の考え方—『「甘え」の構造』

早坂泰次郎の考え方—『人間関係の心理学』

木村敏の考え方—『人と人との間』

日本的主体の傾向のプラス面

ベルクはこの項の結論

先生のまとめ

J3 さんの発表

概要

内容：自我の拡大、甘えの構造

テーマ：絶対的明瞭な西洋の自我、相対的不明瞭な東洋の自我
議論における注意点

言語の違いほど精神構造が異なるかどうかはわからない。

飽くまで日本語に西洋語に「比べて」不明瞭である。（相対的な話）

まとめ：（飽くまで西洋と比較して）**日本は自己が流動的で相対的な存在である。**

リュウタンの発表

先生：一番幼い子を中心になって、順番が決まっていく。

ディスカッション

J1 さん：土居さん、木村さんの違い？

J3 さん：大人の世界で子供に従う具体的に？（あまり聞き取れなかった）J3 さんの

答え：言葉使い。子供の価値観や存在を中心に考えている。子供から見た世界。

中国はどうなる？

暈 内外、自我の延長

C4 さん：フランスや中国では「甘え」というのがないのか？あると思う。田島さんの

答え：当時、「甘え」の説はまだ発展していなかった。「甘え」のみで日本人の行動を説明するのは無理。先生：ヨーロッパに住んでみると、明らかに違う。

C2 さん：赤面恐怖症

C5 さん：日本と西欧における「酩酊」の比較についてです。西欧は、外面的な平静が保たれる。日本は、外観をかなぐり捨てる。どうということ？J3 さんの答え：酔っばらうと、一番本人が気にしているものが外れてしまう。日本人は普段一生懸命に外観をよくするので。

C6 さん：J3 さんの発表の中で、日本と西欧との比較について。比べないと、わからない。比較して話しましょう。別に、明確ではない。

1-2-1 空間にリズムを与える「間」

副読本

「間」という言葉の定義

「間」を具体的に見ていく

「間」の意味するもの：本質的特徴

「間」の使用法

J1 さんの発表

感想

- 極めて難解
- 結論まで非直線的論理構成
- 間の説明に間を含めているように感じる

本の内容が分からなかった。

日本特有、意味を有する間隔、可能性生成、日本人は間を利用

C4 さんの発表

本の内容かなりよく分からない。

P70 に、「間は、離ちがたく結びついた空間と時間であり。。。。。」どんな感覚か、想像しにくい。

家の中の「部屋」??理解しにくい、難しい

水墨画の例：注目するところは違う。

言葉の意味がわかるけど、感覚を持っていない。納得できる。

ディスカッション：

先生から質問：「間」の感覚をわかるか、わからないか。どっちにする？（アンケート 5 段階）

日本では何もない部屋がいい部屋。もてなし、豊か

J1 さん 分かると

C6 さん：「間」にいろいろの可能性が含まれている感じ

杉山先生：何もないからこそ、豊かさが出るという感覚を取るのか？

C4 さん：入れ子構造が理解できる。

「間」と言う限り、何かは周りにする

C1 さん、C5 さん、理解できない

先生：メタファーとアナロジー考えてください。

1-2-2 共存状態の設定＝「縁」

副読本

西欧的時空間への信仰

同時性の観念の考察

日本文化は同時性を許容する——西欧文化：点、線、主語述語的連続を重要視する。

日本文化：面、縁、文脈＝状況的親近性を重要視する。（中国は？）

「縁」の意味の多様性

「縁」の様々な例

C6 さんの発表

1、 概要

「縁」は「間」の概念の移行（過渡）

西欧的時空間への信仰

同時性の概念

「縁」の意味

「縁」の様々な例——縁の意味の延長

「西欧的時空間への信仰」に対してよく分からない

中国料理は日本料理と似ていて、面的だと思う。

儀礼表現に関してはどうしても縁と関連することができないような気がする。

「縁の文化」を提示している

ディスカッション

「あしひきの」 約束事

「手紙の書き出し」中国はどう？

「仲人」 お見合い時

枕詞は中国にあるか？A:ないと思う。B:専門ではないので、はっきりしていない。

筆者の質問：先生の母親の例について、例えば、どんな場合、何を介して行っていたでしょう？

先生：中国は簡略化されているか？中国の現状？

C4さん：簡略化というより、進化。

握手、日本はあまりしない。中国も仲介者に紹介されてから握手

1-2-3 簡略化、コード化する=真行草

副読本

象徴のメタファーによる移行

日本における象徴教育

象徴教育の古典—『枕草子』

禅宗仏教の影響

「真行草」や「真副体」という原理

四種の文字体系

筆法と文字体系の文化への反映

本項の結論

J3：内容はわかる。二人は賛成できるのか、納得できるのか。書法の真行草の例で日本人の特徴を言うのは納得するの？真行草は中国から入ってきたのではないか？

J2：納得というか、わかる。納得させるエピソード。西欧に比較をしようと思うから。

日本と西欧の違いとしたら、この例は適切ではないか。

J1：日本人はたくさん使ってる、大脳と何をどう関係あるの？

柔軟さ、素晴らしさ、

C5：日本間の真行草の違い？先生：今はほとんどない。

C4：真行草の間に変化していくプロセス

J3：古い日本のことだから、よくわからない。

先生：文化的な意味では、100年、200年前のことがある形で残っている。

文化っていうのは、ここ30年の話しではない。

何十年前のことがわかる？

生まれてから両親がやっていたことなら、わかる。

50年前のことが感覚的にわかるのか、どういう形で得ている？意識していない。日本にきてわかった。

J3：日本人としてもわからない。

C1：中国にも真行草があるけど、気づいていなかった。

1-2-4 慣習が権力の座に

副読本

慣習を伝播させる仕組みとして家屋の果たした役割

標準化の典型例としての「畳」という基準尺度の徹底

標準化の理由と結果

決定的教育者としての家屋の役割

象徴の伝播のための家屋の意識的利用

慣習化のための恰好の土壌 俳句の世界

約束事（慣習）の及ぶ限界 俳句の世界

J3さんの発表

概要

慣習と政策（江戸時代のさまざまの禁令）

伝統芸能『俳句』における慣習

レッテル

まとめ

（他国・他文化、特に西洋文化から見れば）日本人は細かいルールに縛られているし、それを非常に気にしている。言語や価値観でもあった自己本位ではなく、他者本位な

側面がここでも強くにじみ出ている。

C5 さんの発表

慣習とは

「畳」という形で標準化された理由（自然的な理由、政治的な理由）

俳句の世界

ディスカッション

J3：発表の中で、日本人は縛られやすいというのは、海外の人と比べて出した結論ですか。

J3：この本は絶対的な話ではなくて、あくまでも西欧（フランス）文化との比較をメインになっている。両方の傾向を述べている。別に、フランス人は縛られていないのではないし、日本人は強く縛られるのではなく、縛られる傾向が強い。「俳句」「畳」のような決まりが多い。

C4：畳の材料も統一していることにちょっと疑問。

J3：大きさと材料は地方差がある。

C4：例えば、畳の大きさを変えたいと思ったのですか。

J3：ないですね。

C4：贈り物する時、贈る側としては中身を重視するか、ちゃんとしたものかどうか。

J3：それはウランさんの考えでしょう。日本人の場合は、本人がほんとうにうれしいかどうかではなくて、独特のお菓子が届いたと感じる、私はちゃんと尊重されていると感じてほしい、ありがたいものを送って、大切なもの、失礼でないもの

C2：会社と学校の広さを言う時、畳を使うか

J3：平方は一般

C4：日本に来て二カ月、何か気付いていますか。

C5：形式が多い、感じが強い。

挨拶

C4：挨拶が頻繁。本当の気持ちかどうか、考えると。毎日会っているし、毎日挨拶する、一人一人に。（この考えについて筆者はよくわからない、納得できない）いいことと思うけど。

割り箸の使い方

C4：日本の決まりは縦で分けるけど、実際に横で分けることも多い

J3：フランス料理も形とマナーがある

由井菌先生：日本に来て変に思ったことがある？

C3：常識が多い。温泉に入る時、常識たくさんある。いちいち決まっている。タオル

を持っていかない、髪をちゃんと結んできれいにする。中国はそんなに厳しくない。

J2：違うところ、

挨拶

中国は返事してくれる、日本は通り過ぎ（日本の方は反対）

シャトルバス、お願いしますって、

J2：しなくてもいい（そういうことは慣習か）感謝の気持ちで

C3：渋さというイメージがよくわからない

J3：落ち着いた。銀閣寺（渋い）、金閣寺

地味だけど、奥ゆかしくて、控え目、自己主張しないけど、よく味わうと、意味が出る、というのが、日本人は割と好き

周りから目立たないように、

スーツ、黒、葬式、結婚式、リクルート

由井菌先生：中国人は金閣寺と銀閣寺はどっちがいいと思った。

象徴は有効であれば、権力の座に、というのは成り立つ。フランス人が読んだら、どう思うか知りたい。

1-2-5 形式が実質に先んじる

副読本

西欧と日本における形式と実質

同一内容を持つ男言葉と女言葉による文章の評価

フランス料理と日本料理における命名法

「ご飯」と「ライス」

人体部位や行為の呼び方

日本の伝統的思考に見られる例

仮面、顔としての「面（おもて）」

「ペルソナ」と「おも」の変遷の比較

表意文字としての漢字

問題の提示

C7さんの発表

本項では、日本文化と西欧文化における形式と実質の関係を具体的な例で論じている。三つの留保をつけている。

日本人＝文脈状況論理

西欧人＝主語述語論理

料理の命名法について

疑問：

C3 さんの発表

三つの留保

西欧と日本における形式と実質の例

フランス料理と日本料理におけるの命名法

日本伝統的思考に見られる例

表意文字としての漢字

食卓における料理の配置

新聞雑誌のページ組

J3：中国では盛り付けを気にしないか。飾りしないか

C3：日本も材料で名前を付けるのもある

C5 日本はその方が少ないのではないかな。どんな社会でも（三つの留保）

J2：中国ではステーキと焼き肉、名前変わらないか。外来の料理はどうなる？

サッカーを中国語で（ここで中国語の命名法を考える）

こんな例でいいのかな。

難しい話、形式が実質に先というのは分かった。料理の例とか

意識的に形式化にするのではないかなと

1－2－6 比喩の実践

副読本

思考レベルでのメタファーの実例

会田雄次の論述に関して

鯖田豊之の論述に関して

鈴木秀夫の論述に関して

中根千枝による論述に関して

和辻哲朗による論述に関して

社会的行動のレベルにおけるメタファーの役割

形式の尊重による実質獲得の促進

北海道における酪農の普及

C3 さんの発表

利点：時間の経済

欠点：実質無視の危険性

日本蜜蜂と西洋蜜蜂の比較（写真、体の特徴、管理、性格、対スズバチ戦法）

C5 さんの発表

形式主義と実質主義

会田雄次の論述

鯖田豊之の論述

鈴木秀夫の論述

中根千枝の論述

形式の尊重による実質獲得の促進

北海道における酪農の普及

まとめ

ディスカッション

イメージ（印象）を否定するのか。

どういうふうにテーマ（比喩の実践）と関わるのか。

何のイメージ？

メタファーを因果関係に間違えて、科学的に論述するという傾向が日本人にある。

ベルクのこの節の理論に賛成しているか

日本はまねする文化

暗黙知と形式知

文系人間と理系人間の区別の違い

メタファーと類似をいっぱい使っているよというようにベルクが主張する。

付録 B

B-1 『空間の日本文化』のアンケート様式（日本語文化専攻用）

お忙しいところご協力いただき、誠にありがとうございます。
どうぞよろしく願いいたします。

お名前： _____ 年齢： _____

1、 『空間の日本文化』の読後の感想を簡単に聞かせてください。

ア 読解が易しい。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

イ 日本文化の理解が深まった。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

ウ ささまざまな分野（言語、自然、芸術、建築等）がつながっていてよかったと思う。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

エ 西欧の事情と比べながら述べられているところがいいと思う。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

オ 中国のことを加えて比較したら、わかりにくいと思う。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

他にはあれば、お述べください。

2、 『空間の日本文化』には第一章一節が 12 項目に分けています。枠内の 12 項目に対して難しさの高い順位をつけてください。

① _____ ② _____ ③ _____

④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____

「音の知覚」	「間」
「擬声語、擬態語」	「縁」
「主語」	「真行草」
「人称」	「慣習が権力の座に」
「自然の出現」	「形式が実質に先んじる」
「自我の他者への共感」	「比喩の実践」

3、 枠内の 12 項目に対して日常生活に近い、普段の生活に役に立つと思う項目の高い順位をつけてください。

① _____ ② _____ ③ _____

④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____

「音の知覚」	「間」
「擬声語、擬態語」	「縁」
「主語」	「真行草」
「人称」	「慣習が権力の座に」
「自然の出現」	「形式が実質に先んじる」
「自我の他者への共感」	「比喩の実践」

4、「間」の概念は『空間の日本文化』を読む前まで、聞いたことがありますか。

はい。 どのような使い方で聞いたのですか。 _____

いいえ。

5、「間」について感覚的には理解しにくいと思います。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

6、西欧語または中国語と比べた上で、日本語主語の特徴を述べてください。

日本語の主語が持つ特徴は「自」「他」の区別と何か関係あると思いますか。

7、『日本概観』の中に、「日本人の家を訪ねる時に、玄関でお辞儀をしてあいさつするのが一般的である」(P54)。「能は、独特な舞台の上で曲に合わせて舞い踊る楽劇である。主役は能面をかぶり、ゆっくりとした仕草で動き、劇的な要素が少ない」(P117)と書いてある。その時、「玄関」と「能」とは、何かつながりがあると思いますか。

はい。どんなつながり： _____

いいえ。

8、学部で擬声語、擬態語について勉強しましたが、その時、擬声語、擬態語は日本人の主体性と関係あると思いましたか。

はい。なぜそう思いましたか。 _____

どんな関係があると思いましたか。 _____

いいえ。

9、『空間の日本文化』を読んでいるうちに、中国のことに関して考えるようになっているでしょうか。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

ご協力どうもありがとうございました。

B-2 『空間の日本文化』のアンケート様式（非日本語文化専攻用）

お忙しいところご協力いただき、誠にありがとうございます。
どうぞよろしく願いいたします。

お名前： _____ 年齢： _____

4、 『空間の日本文化』の読後の感想を簡単に聞かせてください。

ア 読解が易しい。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

イ 日本文化の理解が深まった。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

ウ さまざまな分野（言語、自然、芸術、建築等）がつながっていてよかったと思う。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

オ 西欧の事情と比べながら述べられているところがいいと思う。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

カ 中国のことを加えて比較したら、わかりにくいと思う。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

他にはあれば、お述べください。

5、 『空間の日本文化』には第一章一節が 12 項目に分けています。枠内の 12 項目に対して難しさの高い順位をつけてください。

② _____ ② _____ ③ _____

④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____

「音の知覚」	「間」
「擬声語、擬態語」	「縁」
「主語」	「真行草」
「人称」	「慣習が権力の座に」
「自然の出現」	「形式が実質に先んじる」
「自我の他者への共感」	「比喩の実践」

6、 枠内の 12 項目に対して日常生活に近い、普段の生活に役に立つと思う項目の高い順位をつけてください。

② _____ ② _____ ③ _____

④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____

「音の知覚」	「間」
「擬声語、擬態語」	「縁」
「主語」	「真行草」
「人称」	「慣習が権力の座に」
「自然の出現」	「形式が実質に先んじる」
「自我の他者への共感」	「比喩の実践」

4、「間」の概念は『空間の日本文化』を読む前まで、聞いたことがありますか。

はい。 どのような使い方で聞いたのですか。 _____

いいえ。

5、「間」について感覚的には理解しにくいと思います。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

6、西欧語または中国語と比べた上で、日本語主語の特徴を述べてください。

日本語の主語が持つ特徴は「自」「他」の区別と何か関係あると思いますか。

7、『空間の日本文化』を読んでいるうちに、中国のことに関して考えるようになっていのでしょうか。

そう思う やや思う どちらともいえない あまりそう思わない そう思わない

ご協力どうもありがとうございました。

B-3 『空間の日本文化』のアンケートの回答

西欧語または中国語と比べた上で、日本語主語の特徴を述べてください。日本語の主語が持つ特徴は「自」「他」の区別と何か関係あると思いますか。

原理的理解に基づく答えの参考

日本語の主語は省略しても（なくても）お互いにわかることが多い。明示されないほうが日本式である。こういう特徴は日本人の「自」「他」の区別の弱さにつながる。日本人は他人とはっきり区別しない傾向にあり、他人へ適応できるようにする現れである。

A

種類が多くて、使い方が難しい。使う言葉によってお互いの関係が違うということがわかる。

B

西欧語はよく主語を使う。日本語の場合は主語をよく省略する。中国語と日本語は同じだと思う。よく主語を使う。でも、日本語は自分の話を話している場合が主語をほぼ省略する。日本語の主語は日本人の主体性と対応していると思う。自分の話の場合は自分のことを強調したくないから、主語を省略すると思う。他人の話の場合は他人に尊重の気持ちを表すために、よく主語を使う。

C

日本語の中では、西欧語または中国語のように、常に主語をつけて、主体を強調しません。主語なしの表現形式が主流である。主語を強調しないということから、日本人は常に周辺状況を応じて行動し、社会生活の中で「自分」を強調しないという意識が強いと思う。つまり「自」が常に「他」へ適応する傾向があると思う。

D

主語なしの形が可能です。あいまいな関係です。

E

日本語主語から、特に代名詞を使う時、語尾変化とかない。日本語の主語がよく省略される。西欧語はいつもあると気にしている。

F

日本語主語の特徴とすると、あまり「私」という言葉を使わないことで。

G

日本語主語の特徴：省略される。種類が多い。それにしてもあまり使わないような感じ。

はい、あると思う。相手を高くするためから

H

日本語で、「自」は独立性、「他」非対称

付録C テキストブック

日本文化の原理とその適用
—ベルクの文化体系を用いて—

目次

基本的考え方	3
主体という概念について	3
各節の組み立てについて	4
主語 = 言語上の主体	5
<u>日本文化における主語の現象について</u>	6
<u>原理による現象の解釈</u>	6
家屋と屋外の開放性・閉鎖性 = 建築上の主体	8
<u>日本文化における家屋と屋外の現象について</u>	9
<u>原理による現象の解釈</u>	9
「内と外」 = 人間関係上の主体	10
<u>日本文化における「うち」/「そと」の現象</u>	10
<u>原理による現象の解釈</u>	12
まとめ	13

前書き

日本言語文化専攻出身の学生たちは、学部において『日本概観』、『日本社会文化読解』、『日本の言語とコミュニケーション』等の教科書を勉強したことがあると思う。日本文化における自然の特徴や風俗習慣や国民性などをある程度知っているが、ただ情報として頭に保存し、まだばらばらの知識の形で理解しているレベルに止まっているのではないかと思う。実は、オギュスタン・ベルク氏の文化論によると、ある社会の文化においては、総合原理があり、象徴の比喩的移行によりそれぞれの領域に類似的に出現するのである。つまり、違う領域における関係ないような現象に同じ原理が機能している。例えば、日本語にはよく主語が省略（省略というより元々なくともお互いにわかり合う）されるということが多くの人に知られているが、どういうふうに解釈すればいいか、また、それが日本の家屋と、日本的集団とは何か関係あるかについては考えた人が少ないだろう。私はこれを原理的見方と体系的見方だと考えたい。

私自身の経験から見れば、原理的かつ体系的な見方を身につければ、文化に対する理解がずいぶん深まると思う。特に、日本言語文化専攻出身の学生は日本に留学し、周りのことを観察しているはずであるし、学部で勉強したことと比べがちだと思われる。この時、原理的体系的な見方を持っていれば、実は周りのことがつながっていると発見できるだろうと考えている。

したがって、本稿では、一つの原理（日本文化における主体性が適応可能である）を道筋として、三つの空間の現象を解釈することによって、原理的体系的な見方を分かってもらいたい。つまり、精神的空間の言語に現れる主体（主語）、物理的空間の建築に現れる主体（居住域の開閉性）、社会的空間に現れる主体（個人と集団）という三つの点から日本文化の主体性を見ていく。それによって、三つの空間にまたがる原理を理解してもらい、体系的な理解を促進する。そして、これを一例として、この見方で日本文化への理解が深まっていければ本稿の成功になる。この度、一原理に絞って説明するが、他の原理も三つの空間にまたがって説明できるはずであり、今後の課題として各自を取り組みたい。

基本的考え方

本稿では、ベルク著『空間の日本文化』をベースとして、**精神的空間、物理的空間、社会的空間**から一つずつテーマを取り出し、それぞれのテーマに関する現象を説明し、更に三つの空間にまたがる**原理**を解釈する。『空間の日本文化』では、次の七つの総合原理が取り上げられている。即ち、

- 第一原理：空間は類似的である
- 第二原理：主体は適応可能である
- 第三原理：象徴は有効である
- 第四原理：広がりは集中しうる
- 第五原理：空間は面的である
- 第六原理：細胞が主要（決定的に重要）である
- 第七原理：準拠は隣接している（隣が標準である）

本稿は、「**主体は適応可能である**」という原理に絞って説明する。そして、この原理が**言語上の主語、建築上の開閉性、社会上の人間関係**に現れる。この三つの点について具体的に述べる。

主体という概念について

本稿は日本人の主体を軸として述べるので、まず「主体」について説明する。ベルクは第1章1節「主体は適応可能である」の最初のところで、主体という概念について次のように位置づけている。主体という言葉は、場合ごとに応じ、「自分」、「自我」、「対自（意識的存在者）」、「人格的存在」、「個人」の同義語として用いる。これら様々なアプローチをもって、**日本文化の中で、「主体」という存在が、他人および世界と区別されるその境界の位相をはっきりさせたいからだと述べている。**つまり、日本文化の中で、「主体」の有様（どのように存在するか、他人とはどのように区別するか）をはっきりさせたいとしている。

日本語では、

- （知覚・行動の実存的）主体；
- （文法上の）主語；
- （議論の）主題またはテーマ；
- 哲学上の、自己を意識した主観；

という概念を語彙の上でも区別する、とベルクは述べている。

各節の組み立てについて

まず、節ごとにベルクの論述の流れを知識表現変換により図表化する。この図表化の作業により、文章全体を一段上のレベルから文章の持つ大きな構造が見えるだろうと考えている。その次に、図表に従って構造を説明する。ベルクの文章が難解とされているので、全体的構造が見えることによって、全体的な意味を頭に入れておくと、分かりやすくなると思う。それをもとに、その節に出ている日本文化の現象・事実・特徴を紹介し、その現象を原理で解釈する。

一、主語＝言語上の主体

まず、上の「主語＝言語上の主体」のテーマに注目してもらいたい。主体が言語上に現れる場合は、文法上の主語になるということを、ここで強調しておきたい。

この節の文章の構造（論述の流れ、要素間の関係構造）を図1に表現してみる。この図の意味するところは次の通りである。

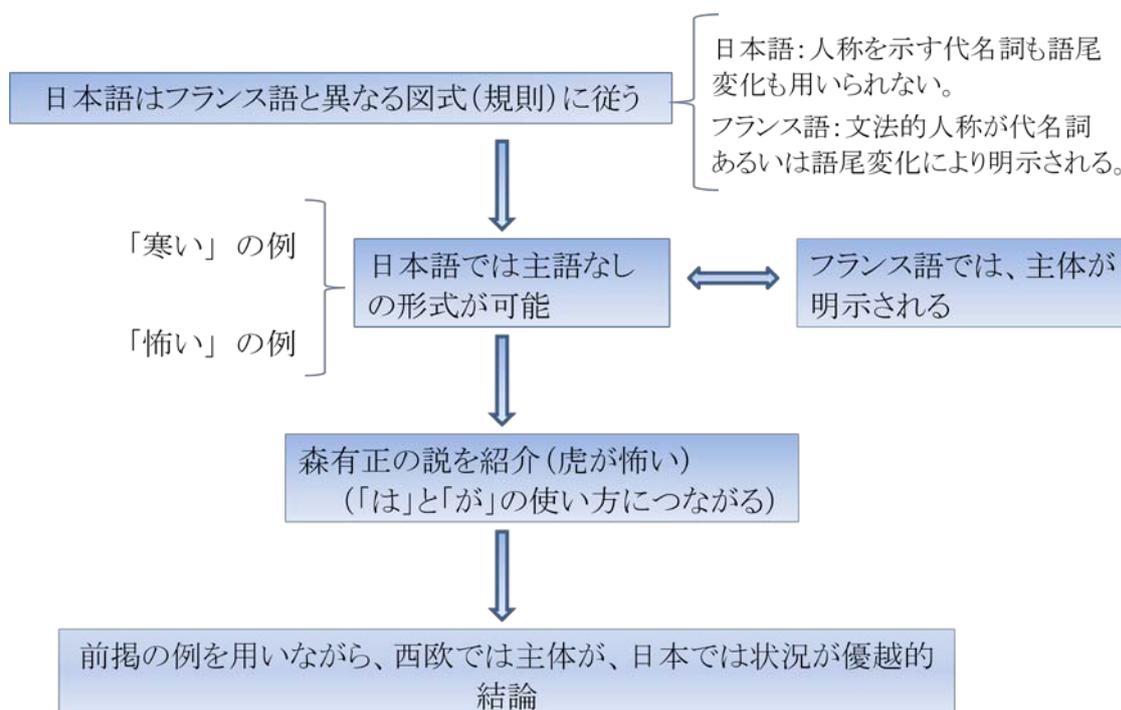


図1 本項「主語＝言語上の主体」の概要図

まず、日本語とフランス語は異なる構図に従って機能していることを提示する。つまり、日本語では、人称を示す代名詞も語尾変化も用いられない。フランス語では、動詞の主語である文法的人称が代名詞または語尾変化によって明示される（人称変化で、誰が主体（主語）なのかが分かる）。次に、ベルクは日本語では主語なしの形式が可能で、フランス語では、主体（主語）が明示されることを説明するために、「寒い」と「怖い」の例を挙げている。それから、森有正の説を紹介し、「虎が怖い」という文章の言い方を例として、日本語の主体と対象について述べられている。最後に日本文化では**主体と対象が、ある共通の雰囲気、同時に参与しているのに対して、西欧では、主体は対象に対しある距りを設ける、即ち、日本は状況が、西欧は主体が優越的である結論**をつけている。

日本文化における主語の現象について

「好きです」、「寒い」、「虎が怖い」というセンテンスの言い方について述べる。

最初に、「好きです」については、ベルク自身が日本の戦争映画の一シーンに驚いたことを挙げている。つまり、危険が迫ってきたにもかかわらず、持ち場を離れたくないという看護婦がいる。医者が理由を尋ねると、彼女はしばらく黙っているが、「好きです」と言う。このまま、中国語に訳したら、「喜欢/爱」としかならないであろう。誰が誰を愛しているかを示すような主語、目的語はいっさいない。何年間日本語を習った人には、そのような言い方に慣れているかもしれないが、習い始めていたベルクにカルチャー・ショックだったそうである。つまり、日本語で、「**あなたが、何かを、もしくは誰かを、欲する、恐れる、愛する……**」と言う時、**主語（文法上の主体）は「あなた」ではなく、あなたの感情の対象である**。「お酒が好きです」（中国訳は「我喜欢酒」、主語、述語、目的語の通り）では、主語は「酒」になる。

次に、「寒い」という言い方については、

i 英語では、I am cold、中国語では「我好冷」：「(自分の感覚として) 寒い」

ii 英語では、It is cold、中国語では「今天天气真冷」：「(天候について、周囲などが) 寒い」の二つを区別する。もちろん、中国語では「真冷啊」（主語なし）とも言うが、日本語では主語なしの形「寒い」のほうが一般的で、主体（主語）をつけて言わないところに注目してもらいたい。

最後に、「虎が怖い」というセンテンスから日本語の特徴を見ていこう。中国語では、「我害怕老虎」「老虎是可怕的」「老虎令我害怕」というような言い方をするが、日本語では、怖い感じをする**主体が文法的な主語となるのではなく、「虎」という恐怖の対象が文法的な主語**となっている。

原理による現象の解釈

以上の例からみると、日本語では**主語・述語というパターンが普遍的なものではない**ことが分かってくる。森有正氏は、このパターンが日本語にはなじまないことを示した。例えば、日本語専攻の学生たちは、日本語を習い始めた最初の頃、**自己紹介**する場合、「私は〇〇です」と言いがちだろう。それがまだ日本語に慣れていないようで、「私は」を言わないほうがいと先生に教わっただろう。また、私自身にあったアルバイトの経験を話したい。レジをしている私は、すこし暇だと思ってかご整理に行こうとしたら、先輩に「**するわ**」と言われた。それは、「私がするから、あなたはしなくてもいいよ」というような意味で捉えたらいいと思う。しかし、「私」と「あなた」をつけてそういう言い方をしたら、あの先輩の主体の境界は私とはっきり区別

されるような感じになる。日本文化では主語をはっきり言わないのは、主体は他人とはっきり区別されたくないように思われる。日本語になじまないと、急に「するわ」と言われてたぶん漠然になると思う。中国人からみれば、「做」だけになるので、誰が何をするかはまったく明示されていない。

日本文化における主体と対象が、ある共通の雰囲気、そこに付随して生じる場面の雰囲気に、同時に参加しているので、「寒い」と「虎が怖い」を言い、主語を言わなくても、話し手と聞き手にはわかる。西欧語または中国語での言い方から、西欧語または中国語の場合は主体が先行的、場面が客観的であることはわかる。つまり、主語を示す代名詞の明示により主体は対象に対する距離を設けることになる。それに対して、日本文化における主体はお互いに共感でき、主体の境界がはっきり区別されないから、主語の明示をしなくても良い。または、お互いに共感できるために、主体の境界がはっきり区別されないために、明示しないということも考えられるであろう。

二、家屋と屋外の開放性・閉鎖性＝建築上の主体

家屋と屋外の開放性と閉鎖性について、ベルクが述べた見方を表1に示す。

周囲の空間との関係		日本	西欧
居住域	部屋と部屋	開	閉
	家屋と庭園	開	開
	庭園と近隣	閉	開
	都市と田園	開	閉

表1 家屋と屋外の開閉性における日本と西欧の対照

日本は、庭園が壁で囲まれているだけで、あとは開放的である。西欧は都市の城壁が最初の壁で、その他の壁としては、家屋内の部屋同士の間の壁がある。

日本文化における家屋と屋外の現象について

1, 家屋内部（部屋と部屋）

日本の場合、仕切りが少ない。部屋と部屋を分けるのは壁ではなく、横滑り、取り外しも可能な「襖」、「障子」でできている。西欧の場合は、壁で仕切られたいくつかの部屋が作られ、頑丈な扉がはめられ、個人の寝室なら錠で閉められるようになる。



2, 家屋と庭園、及び庭園と近隣との関係

物理的に見て、日本家屋は庭園に対してあまり閉ざされていない。庭園は近隣に

対し、西欧より閉ざされている。ヨーロッパと違うのは、日本の場合、閉鎖が、庭園に対する家屋(わずかな閉鎖)近隣に対する庭園(中位もしくは強度の閉鎖)という二段階にわたっているということである。



西欧



日本家屋

3、都市と田園との関係

日本の都市では、田園部との物質的違いがあまりはっきりしていない。伝統的都市形態が日本では、あまりきわだった特徴(田舎に対して都市としての)を持たない。日本の都市の城壁は、都市の位置する小さな平地を囲む山々だと考えられる。それに対して、中国社会学者・費孝通氏は著書「郷土中国」で、中国社会は「閉鎖的な村社会」と指摘した。そして、徐平の『围墙与圈子』論文に、中国における最も古く、長い塼は万里の長城になる。長城は実際に北方民族の攻撃を防ぐ機能を果たしたことがないが、塼を築く考え方が私たちの文化に残っている、と述べる。丁未の『中国的围墙文化』によると、庶民の塼がだんだん城壁に発展してきた。もっと安全のため、壮観のため、また城壁に望楼を建てたり、周囲に堀を作ったり、城の外にまた吊り橋を加えたりした。城壁の機能は上手に果たされたそうである。したがって、日本の都市と田園との間は開放的で、中国は閉鎖的であると考えられる。

原理による現象の解釈

ベルクは伝統的な日本家屋では、「**寝室を本当に他から孤立させようという精神的欲求もないし、また物理的にも不可能である**」と述べている。これは、**個人性の弱さに呼応している**、と述べる。この辺は**主語に現れている原理と類似**している。つまり、主体は他人との境界が区別されなく、家は適応できるような建て方をされている。

そして、部屋と部屋の関係が「開」で、家屋と庭園の関係が「開」で、庭園と近隣の関係が「閉」であるという現象から、家族同士もしくは同じ家に属する同士の間には開放的で、この家以外の人に対して閉鎖的であるように思われる。これは、次の節「内と外」では「同じグループの成員とあまり区別されない」とつながる。

三、「内と外」（集団意識）＝人間関係上の主体

本項の概要を図2に示しておく。

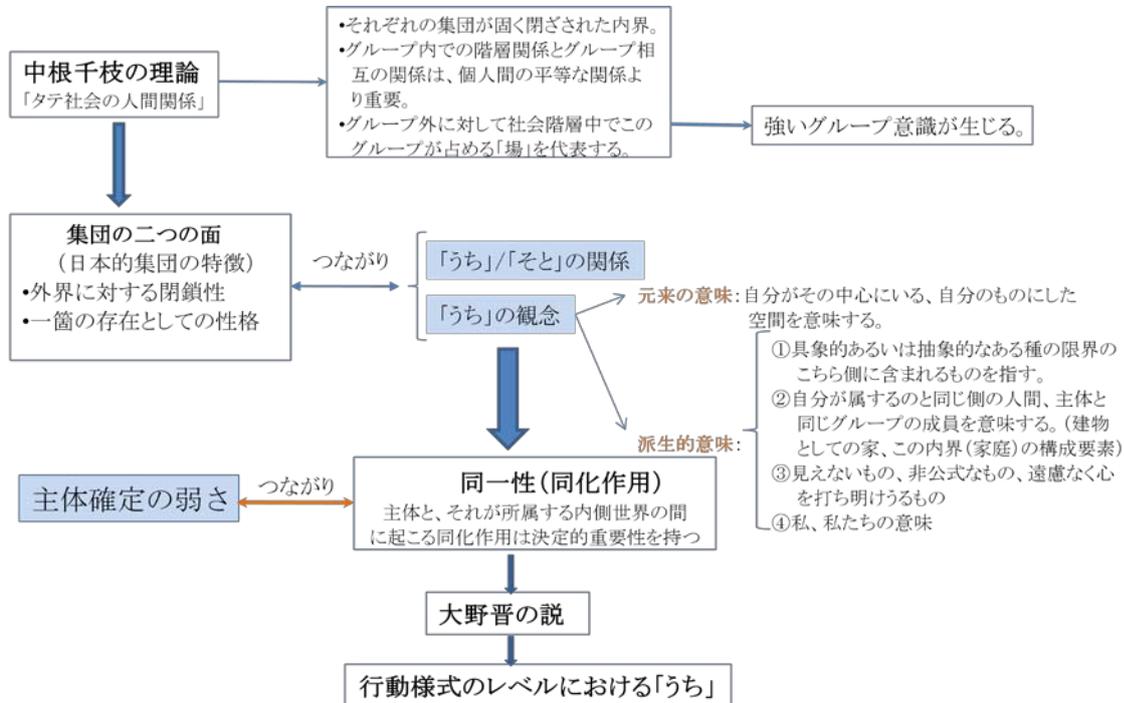


図2 本項「内界と外界」の概要図

この図の説明は次の通りである。ベルクはまず、日本社会に関する本で、最も大きな影響力をもったものとして、文化人類学者中根千枝氏の『**タテ社会の人間関係**』を取り上げている。次に、中根氏の基本的な考えを紹介し、中根理論から浮かび上がる**集団の二つの面は**日本的集団のきわめて顕著な特徴**であると述べる。即ち、一個の存在としての性格、および外界に対する閉鎖性である。また、この二つは「うちの観念」に、「うち」/「そと」の関係につながると指摘した。それから、「うち」の意味について述べる。更に**決定的重要性を持つのは、主体と、それが所属する内側世界の間にかかる同化作用**であると指摘した。そして、この同化作用は、「わたし/わたしたち」「(わたしの) 家 (うち)」「(わたしの) 内側世界＝所属集団」という三概念が同一の言葉で示されるところに、読み取れると述べる。更に、この同一性は**主体確定の弱さにつながると結論づけている**。そして、大野晋の説を説明している。ここまでは、言葉に基づいた「うち」の観念の分析であったが、最後に、行動様式のレベルにおける「うち」について述べている。**

日本文化における「うち」/「そと」の現象

ベルクは主体とそれが属する内側世界の間にかかる同化作用が主体確定の弱さにつながると指摘しているので、本稿では、主に主体と内側世界の関係に関する現象を見ていくとする。

まず、言葉に基づいた「うち」に関する現象を見ていく。自分が属するのと同じ側の人間、主体と同じグループの成員をも意味する。その中で一番はっきりしているのは、「うち=家」で、そこからこの内側世界を包含するもの、つまり、建物としての家、さらに、この内界 (=家庭) の構成要素、特に妻もしくは夫を指す。例えば、「家内」で妻のことを呼ぶのはある。そして、「うちの学校」、「うちの研究室」とはよく言うであろう。こうして「うち」は、成員以外の人間とのあらゆる関係における、多数の集団的「わたし」(学校のクラス、会社等) に適用できるのであるとベルクは述べる。つまり、「わたし/わたしたち」「(わたしの) 家 (うち)」「(わたしの) 内側世界=所属集団」という三つの概念が同一の言葉「うち」で示される。

大野の説によると、昔の日本人が、おそらく方位方角以上に内/外の対立を重要視したと思われるのである。そして、指示詞の「こ」系列と「か(あ)」系列の区別も、グループの内側のものとするか、外側世界のものとするかのこととつながるそうである。

また、「内輪(うちわ)」、「身内(みうち)」「仲間内(なかまうち)」といった言葉も内/外の対立と結びついている。

次に、行動様式から「うち」に関する現象を見ていこう。行動様式のレベルでの「うち」は、非公式的な場所である。つまり、お互いだけの世界なのである。

(1) そこでは個人間の関係が、外界の人間との関係には必要な緩衝材もなく、直接方式で打ち立てられる。外側世界に対しては、各人が自分の「うち」を完全に代表し、場合によっては責任をとりさえするのである。

(2) それに社会自体が、過ちを犯した成員と同じ資格で、同じグループの他の成員一人一人にも責任を取らせることによって、この連帯性を想起させるのである。

(3) 逆にまた、「うち」の問題は互いの中だけで解決されるべきであり、それを公の場所に持ち出すのはよくないとされる(例えば、雇傭者/被雇傭者、家主/借家人の関係)。

(4) 電気技師としてではなく、東芝の社員として自己紹介する。肝心なのは、個人の属性(職種、家柄、階級等)ではなく、どんな「場」に属しているかである。そこから強いグループ意識が生じる。同じグループの成員間の関係のほうが、他のグループの成員との関係に優るから、例えば、家(社会的な意味での)の中では、結婚によってそこに組み入れられた主婦たちのほうが、他の家に嫁いで家を離れた姉妹、娘たちより上位を占めるのである。これは、血のつながりがいつまでも重要視される中国の社会とは対称的である。

原理による現象の解釈

ベルクは「うち」という言葉の意味派生に「**内側世界における同化作用**」を読み取れると主張する。つまり、「わたし/わたしたち」「(わたしの) 家 (うち)」「(わたしの) 内側世界=所属集団」という三つの概念が同一の言葉「うち」で示されるという事実が重要であって、これは、主体と、それが所属する内側世界の間にかかる「同化作用」の存在を示している、と論述する。そして、**この同化作用によってもたらされる同一性は「主体確定の弱さ」につながるのである、**と指摘する。

大野晋は、内的空間（「うち」）では**主体が同じグループの成員とあまり区別されず、「個人の独立という意識は希薄である」と**言っている。ここは、前に述べた**日本の居住域における開閉性につながる**と考えられる。日本の居住域においては、部屋と部屋の間は開放的で、家屋と庭園の間も開放的であるが、庭園と近隣の関係は閉鎖的である。つまり、自分の家の範囲であれば、開放的で、他人の家になると、閉鎖的になる。この事実から、物理的に見ても、同じグループ（家庭）の範囲であれば、区別されず、個人の独立という意識が弱い、という原理が見えるだろう。

まとめ

以上の三節を図3にまとめてみる。「主体は適応可能である」という原理は言語、建築、人間関係に類似的に現れると、「主語なしの形が可能である」、「伝統的な日本家屋では寝室を本当に他から孤立させようという精神的欲求もないし、物理的にも不可能である」、更に、「主体と、それが所属する内側世界の間にかかる『同化作用』」というような現象になる。そして、原理が言語、建築、人間関係の分野の間に比喩的に移行している。

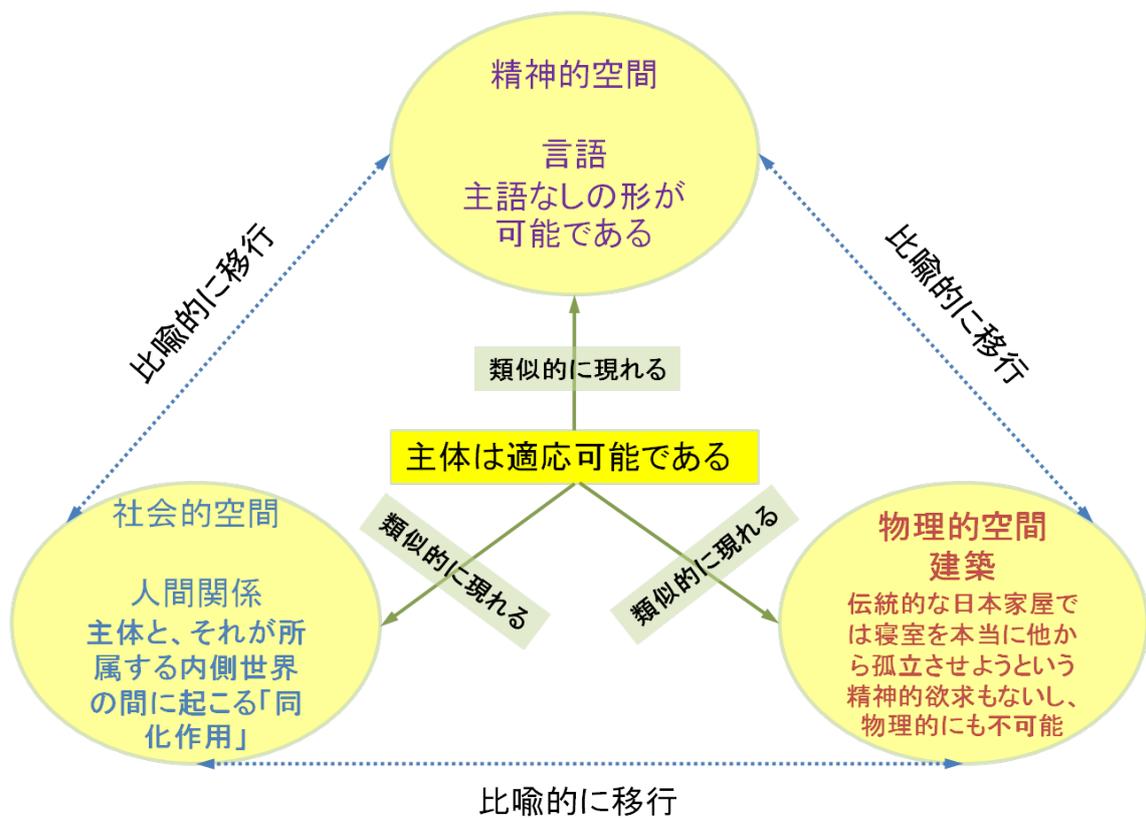


図3 本稿のまとめ構図

本稿は「主体は適応可能である」という原理だけを扱っているが、他の原理も三つの空間にまたがって具体例を通して解説できる。そうすると、ベルクの文化論のモデルが見えるようになる（図4）。つまり、ある社会の文化を規定する原理を多くの具体例を通して抽出し、各空間にそれらの原理が比喩的に（メタファーとして）移行し、類似的に（アナロジーとして）現れる。

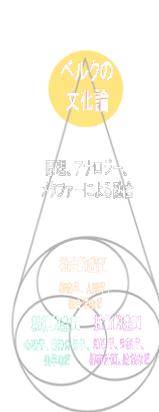


図4 ベルクの文化論の構図

参考文献

オギュスタン・ベルク：空間の日本文化、ちくま学芸文庫、1994

杉山公造：2010年度「知識表現論」講義用資料、2010

http://www.google.co.jp/search?hl=ja&source=hp&q=%E3%81%B5%E3%81%99%E3%81%BE&aq=f&aqi=g1g-r9&aql=&oq=&gs_rfai

丁未：中国的围墙文化，2009

徐平：围墙与圈子，人民论坛，2010

付録D

D-1 テスト様式

お忙しいところ、実験にご協力いただき、誠にありがとうございます。
個人情報を出すことは決してありません。率直にお答えくださいますよう、よろしく
お願いいたします。

あなたご自身についてお尋ねします。

- 1, 氏名 : _____
- 2, 学年 :
- 3, E-mail : _____
- 4, 日本語レベル :
 - a. 一級
 - b. 二級
 - c. その他

3, 日本文化について、「内と外」の概念がよく話に取り上げられる。ベルクによると、「うち」は成員以外の人間とのあらゆる関係における、多数の集団的「わたし」（学校のクラス、会社等）に適用できる。つまり、「わたし/わたしたち」「（わたしの）家（うち）」「（わたしの）内側世界＝所属世界」という三つの概念が同じ言葉（うち）で示されることができる。この現象について、原理を使って説明してください。（ヒント言葉：同化作用、主体）

4, 三つの部分（主語、家屋の閉鎖性、うちとそと）は、関係があります。その関係を述べてください。

D-2 テキストブックアンケートの様式

テキストブック「日本文化の原理と適用」に関するアンケート

お忙しいところ実験にご協力いただき、誠にありがとうございました。本テキストブックをお読みになってからの感想やご意見などをお聞きしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

あなたご自身についてお伺いします。

1, 名前：

2, 学年：

3, E-mail : _____

4, 日本語のレベル

a. 一級

b. 二級

c.その他

「日本文化の原理とその適用」テキストブックの読後のご感想についてお伺いします。

1, 日本文化への原理解が深まることができましたと思いますか。

- a. とてもそう思う b. そう思う c. どちらともいえない
d. そう思わない e. とてもそう思わない

2, 日本文化への体系的理解が深まることができましたと思いますか。

- a. とてもそう思う b. そう思う c. どちらともいえない
d. そう思わない e. とてもそう思わない

3, このテキストブックの内容は理解しやすいと思いますか。

- a. とても理解しにくい b. 理解しにくい c. どちらともいえない
d. 理解しやすい e. とても理解しやすい

ここで a か b と答えた方にお伺いします。

理解しにくいと思われる理由をご自由にお書きください。

4, 各節の概要図がテキストブックの内容理解に役立つと思いますか。

- a. とてもそう思う b. そう思う c. どちらともいえない
d. そう思わない e. とてもそう思わない

ここで d か e と答えた方にお伺いします。

役に立たないと思われる理由をご自由にお書きください。

5, まとめ部分にある図3 (まとめ構図) がテキストブックの内容理解に役立つと思いますか。

- a. とてもそう思う b. そう思う c. どちらともいえない
d. そう思わない e. とてもそう思わない

ここでdかeと答えた方にお伺いします。

役に立たないと思われる理由をご自由にお書きください。

6, 中国の事例がテキストブックに含まれているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。

- a. とてもそう思う b. そう思う c. どちらともいえない
d. そう思わない e. とてもそう思わない

ここでdかeと答えた方にお伺いします。

役に立たないと思われる理由をご自由にお書きください。

7, 筆者自身の日本滞在経験がテキストブックに含まれているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。

- a. とてもそう思う b. そう思う c. どちらともいえない
d. そう思わない e. とてもそう思わない

ここでdかeと答えた方にお伺いします。

役に立たないと思われる理由をご自由にお書きください。

8, 図表や重要語句にカラーを付けているが、テキストブックの内容理解に役立つと思いますか。

- a. とてもそう思う b. そう思う c. どちらともいえない
d. そう思わない e. とてもそう思わない

ここで d か e と答えた方にお伺いします。

役に立たないと思われる理由をご自由にお書きください。

9, このテキストブックの形で日本文化を勉強していきたいと思いますか。

- a. とてもそう思う b. そう思う c. どちらともいえない
d. そう思わない e. とてもそう思わない

ここで d か e と答えた方にお伺いします。

勉強していきたくないと思われる理由をご自由にお書きください。

10, 本テキストブックに関して、ご提案やご意見などがあれば、ご自由にお書きください。

D-3 テスト結果

	問い 1	問い 2	問い 3	問い 4	総得点
A1	10	10	8	10	38
A2	5	9	8	9	31
A3	5	9	2	8	24
A4	4	5	8	3	20
A5	6	9	5	8	28
A6	10	10	10	10	40
A7	9	9	3	9	30
A8	8	8	6	8	30
A 平均値	7.13	8.63	6.25	8.13	30.13
B1	1	5	3	0	9
B2	2	0	3	0	5
B3	8	8	8	5	29
B4	3	5	3	0	11
B5	5	5	0	2	12
B6	0	7	2	0	9
B7	7	0	0	0	7
B8	8	2	0	0	10
B 平均値	4.25	4.00	2.38	0.88	11.5